

ドイツ・ヨーロッパ研究室(DESK)
主催
東京大学教養学部創立50周年記念
国際学術企画

21世紀「ヨーロッパ」の理念： 政治思想の未来

2002年3月27日(水曜日)～
4月2日(火曜日)

東京大学教養学部創立50周年事業の一環をなすこの国際学術企画は、世界的に著名なイタリアの哲学者であるマッシモ・カッチャーリ氏(ヴェネツィア建築大学正教授)を招聘して行われた。

1944年ヴェネツィア生まれのカッチャーリ氏は、20世紀初頭の中欧文化をめぐる哲学・美学的研究から出発し、1980年代には、現代文化における神学の伝統と哲学の交錯に関する分析に進んでいる(この時期の著作『必要なる天使』には邦訳がある)作曲家レイジ・ノーノのオペラ《プロメテオ》の台本を手がけるなど、音楽や建築といった芸術創造の現場とも密接な関係をもっている。近年は特にヨーロッパの歴史における政治と哲学の結びつきを考察しており、その結実が著書『ヨーロッパの地・哲学』(1994)と『群島』(1997)である。学術研究のかたわら、政治にも深くコミットし、1976年から1983年までイタリアの下院議員、1993年から2000年までヴェネツィア市長、さらに欧州議会議員を務め、現在はヴェネト州の州議会議員である。

このようなカッチャーリ氏の思想的および政治的経歴を背景として、本学術企画では、『群島』で展開されたヨーロッパの理念をテーマとした講演会、および、建築と哲学の両面から見た現代における「都市」の思想とは何かをめぐるシンポジウムの2つの催しが計画された。なお、両者は共にイタリア文化会館の後援を得ており、シンポジウムについてはさらにセゾン文化財団の後援も得て、「セゾン文化フォーラム」として開催された。



1. マッシモ・カッチャーリ氏講演会 「群島としてのヨーロッパ」

2002年3月27日(水曜日) 14:30-18:15
於: 一橋記念講堂

あいにくの雨天となったものの、カッチャーリ氏の「群島」の理念を下敷きにしたというノーノの《プロメテオ》が低く流れる会場には、学外からも多くの聴衆が詰めかけた。本講演会は日伊同時通訳で行われ、宮下志朗教授(言語情報科学専攻)司会のもと、まず古田元夫教養学部長による挨拶とDESKの紹介がなされた。引き続き、宮下氏からカッチャーリ氏の経歴が説明されたのち、講演が開始された。

カッチャーリ氏は、自分のヨーロッパ統合の理念は、ヨーロッパ自体においても必ずしも十分には理解されていない、異端的な見方になるだろう、という前置きから始めた。単一通貨ユーロによって、第二次大戦後に始まったヨーロッパの経済的統合は完結したわ

けだが、これは統合プロセスを経済分野に厳しく限定し、政治的アイデンティティを強調しなかったからこそ実現できたものである。政治的アイデンティティのない「未確認政治物体」としての現在のヨーロッパは、こうしたひとつの政治的戦略の産物である。カッチャーリ氏は、この戦略の必然性を歴史的に説明したうえで、現在におけるヨーロッパの政治的支配理念を「マーストリヒトの哲学」と呼ぶ。それは、経済的な利益を相互に享受するという統合の目的を壊しかねない政治的決定をすべて排除するという、「安定性」の原則である。

この原則と並んで重要なものを、カッチャーリ氏は統合の「不可逆性」に見る。これは、欧州諸国が安定性の「自然な」成長のために相互協力をし続けることを意味する。こうした点から、ヨーロッパ統合とは政治思想的には「非政治化」にほかならない。ヨーロッパ統合という非政治化のプロセスの安定と不可逆性は、市場と自由貿易の原則



のもとでのみ保証される。このような現状は、恣意的な政治的決定の及ばない自動的メカニズムによって調整される社会という、トマス・モアをはじめとする古典的ユートピアに似通っている。ヨーロッパは一種のユートピア的「保護区」になっている。ヨーロッパが陥っている政治的ディレンマ（経済的に強く政治的に弱いヨーロッパ）の根を、カッチャーリ氏はこうした点に見る。

このような歴史的認識のもとに、本講演では、地方レベルと共同体レベルの決定とを調整する「補完性の原則」の重要性が指摘され、安定性と同質性の原則が優越することのない、連邦主義的統合の可能性が強調された。カッチャーリ氏はそこに、ヨーロッパの理念の中心にある「群島性」の想起を見るのである。群島とは、複数の際だった個性同士が、他のものが持ち合わせていない点において結びつき、ときには相争う場にほかならない。それはヨーロッパの病でもあるが、この病から回復するとヨーロッパは死んでしまう。ヨーロッパを一つに還元することはできない。それは、他者との関係をつねに必要とする、歓待性（ホスピタリティ）にあふれた共同体でなければならない。そのためには、都市や地方からなる「群島」の補完性を見失ってはならない。自らをそのような群島として想起することができるか否か、それがヨーロッパの取り組みもうとしている挑戦である、とカッチャーリ氏は講演を結論づけた。

物静かな印象を与えるカッチャーリ氏であるが、語るほどに雄弁となり、非常に熱のこもった講演は予定時間を大幅に超え、休憩を挟んだ後半のディスカッションをやむを得ず短縮せざるを得なかった。コメンテーターの国立西洋美術館長・榊山紘一氏、東京外国語大学大学院地域文化研究科教授・上村忠男氏、東京大学大学院総合文化研究科助教授・高橋哲哉氏の三氏（発言

順）には無理をお願いし、限られた時間でコメントと質問を頂いた。榊山氏からは、多数の都市国家が存在してきたイタリアの歴史と群島理念との関係、さまざまな政治的決定を調整する政府実現の可能性、および、人間学から国際政治にいたる幅広い射程をもつ群島理念のさらなる展開という3点について、コメントと質問を頂戴した。上村氏は、カッチャーリ氏の議論を、アントニオ・ネグリ/マイケル・ハートの著書『帝国』やジョルジョ・アガンベンの「世界内戦」論と並べて、イタリア発の新しい世界認識のひとつと位置づけた。また、群島論を、カール・シュミットによる「大地のノモス」論に代わる、ヨーロッパ共同体論のパラダイム転換としてとらえる見方を示し、カルロ・ギンズブルグをはじめとする歴史家の研究とも共通点があることを指摘した。高橋氏のコメントでは、ジャック・デリダのヨーロッパ論『他の岬』との比較が示唆されたうえで、9.11事件以後の切迫した事態において、ヨーロッパがアメリカ合衆国主導の対テロ戦争に追隨するのか、それとも独自の対応をとるのかという、ヨーロッパとその外部との関係における政治的決定のあり方が問われた。また、会場からも質問票により多数の質問が寄せられ、そのなかから、ユートピア化したヨーロッパが逆ユートピアに反転する危険と、現状の統合過程における安定性と不可逆性がヨーロッパの外部に及ぼす政治的作用の2つをめぐる質問が取り上げられた。これらのコメントや質問に対する応答をここで紹介する余裕はないため、関心のある方は、講演会全体にわたるカッチャーリ氏の発言を再構成した記録（八十田博人訳「群島としてのヨーロッパ」、『現代思想』2002年8月号所収）および関連する内容を含むインタビュー（「マッシモ・カッチャーリに聞く アナロジーの論理学」、『批評空間』第III期4号所収）を参照していただきたい。

なお、講演会に引き続いてカッチャーリ氏来日を記念したレセプションが開かれたが、こちらも幅広い分野に渡る研究者のほか、イタリア関係諸団体からの参加者も得て盛会であった。この場では、DIGES(Diploma for German and European Studies)授与式も合わせて行われた。

2. 国際シンポジウム

「都市の政治哲学をめくって：ヨーロッパ/アジアの地-哲学」

2002年4月2日(火曜日) 18:00-21:00

於: ルテアトル銀座

会場とした劇場は収容人数が700人を超えるホールであったが、建築専攻の学生など、講演会とは異なる層の聴衆で盛況となった。本シンポジウムも日伊同時通訳で実施された。まず、司会の小林康夫教授（超域文化科学専攻）により、DESKの紹介が行われ、DAADというドイツの団体からの資金援助でイタリアの思想家を招聘するというこの催しが、国民国家の枠を越えたヨーロッパとの知的交流の現状を如実に示している点に聴衆の注意を喚起した。続くカッチャーリ氏の基調講演は「現代都市の哲学」と題され、都市の理念と現実との絡み合いを、古代都市から近代のメトロポリスをへて、現在のポスト・メトロポリスにいたるまで思想的に追究した、抽象度の高い内容であった。カッチャーリ氏は、都市が一方では安全性や安定を要求され、他方では際だった効率性と流動性を求められるという矛盾にこそ、都市の都市たる所以があるととらえる。都市とはこの両者の衝突に形を与えるための永遠の実験にほかならない。ポスト・メトロポリスが孕む問題もこの衝突が先鋭化したものであり、都市がコミュニケーション・ネットワークの拡がりとともにあらゆるテリトリーの境界を廃絶するのように見える一方で、われわれには自分の身体を定位する場所がいまだに必要であるという矛盾に起因している。カッチャーリ氏はそこで、ポスト・メトロポリスというテリトリーと、われわれが住むことのできる建造物や場所との照応および類似を再発見しなければならない、と説く。都市はいわば「一般相対性」の空間でなければならない、都市空間はモナド的な個体が相互作用を行いながら、予測不能な形で変形してゆく場となる必要がある。「群島」の理念を思い起こさせる、このような空間的秩序を作り出す建築という「知」への期待の表明によって、基調講演は閉じられた。

建築家磯崎新氏、京都大学経済研究所助教授・浅田彰氏を迎えたディスカッションでは、司会の小林氏からまず、



このシンポジウムの参加者4人とルイジ・ノーノとの深いつながりが話の糸口として紹介された。磯崎氏はそれを受けて、ノーノの《プロメテオ》を上演するためのホールを秋吉台芸術村に設計した経緯を語り、群島理念と《プロメテオ》の関係をめぐるカッチャーリ氏との質疑応答がなされた。浅田氏は「群島としての都市（建築）」というイメージと対照をなすものとして、「海」と「孤島」のイデオロギーの存在を指摘した。「海」とはグローバル資本主義とWWWの「海」であり、他方の「孤島」イデオロギーとはユートピア思想である。浅田氏はさらに、群島の概念を「島国」日本の置かれた状況と結びつけることで、アジアにおける地・哲学的な問題を提起した。これに対するカッチャーリ氏の応答で興味深かったのは、海をグローバル化のメタファーとしてとらえることはヨーロッパ人には難しい、という発言である。地・哲学的な差異が図らずも明らかになったというところだろうか。

討議の後半では、都市のプランニングにおける「決定」をめぐる、政治的

決定がどこでどのような役割を担うのか、都市計画のマスタープランが意味をなさなくなった現状に対応した都市作りのための新たなロジックは何か、あるいは決定不能なものをいかに決定のなかに組み込むか、といった問題が、磯崎氏の人工島計画「海市」プロジェクトや神戸の大震災、9.11事件後のニューヨーク、ダニエル・リベスキンドのベルリン・ユダヤ博物館などを具体例として、多方面から議論された。都市・建築・政治・歴史・哲学・音楽を縦横にめぐったこの討議は、簡単な要約を許さない、極めて密度の濃いものだった。本シンポジウム（基調講演を含む）の記録は雑誌に掲載されているので（「シンポジウム 都市の政治哲学をめぐって」、『批評空間』第III期4号所収）是非一読をお願いしたい。



なお、2002年4月1日（月曜日）には東京大学駒場キャンパス2号館308号室で、八十田博人氏、阿部真弓氏を中心とする学生のグループが企画した、カッチャーリ氏を囲む参加者限定のコロキウムが開催された。十数名の教官、学生が出席し、ハイデガーや九鬼周造の思想を中心に東洋と西洋の精神性について論じたカッチャーリ氏の講演を受け、活発な質疑が行われた。このコ

ロキウムばかりでなく、今回の企画全体に渡って、八十田、阿部両氏をはじめとする学生の皆さんの尽力が多大なものであったことを付記しておきたい。

田中 純（超域文化科学専攻）

ヨハネス・ヴァイス氏講演会

「現代社会における 宗教の役割」

2002年3月18日（月曜日）

於： 東京大学駒場キャンパス
視聴覚ホール

2001年9月11日のアメリカ合衆国における同時多発テロ事件をきっかけとして、「宗教」というテーマがふたたび大きくクローズアップされている。昨年のフランクフルト書籍市平和賞を受賞した際に、ハーバースマスが行った講演「信仰と宗教」で、テロ事件との関連を考慮したかたちで、宗教の問題を取り上げたことは記憶に新しい。

こうした流れを受けて、DESKでは、マックス・ウェーバー研究者として有名なドイツ・カッセル大学教授ヨハネス・ヴァイス氏を招いて、「現代社会における宗教の役割」というテーマで講演を行っていただいた。現代社会において「宗教」をどのように捉え、どのように理論的に位置づけることができるか、幅広い視点に立って考えてみようというのが、今回の催しの意図であった。現代においては、経済のグローバル化によって、アメリカ・モデルを基礎とした社会のグローバル化が急速に進展している。そのなかであって今なお文化的・地域的特殊性を形成しているのが、宗教的価値観や世界観である。宗教は、社会的なグローバル化



にたいする根強い抵抗の力となりうるのか、それとも、ウェーバーが分析してみせたように、「資本主義の精神」というかたちで宗教的な価値観が経済的社会的近代化を推進する力となるのだろうか。この問題について、ヴァイス氏は、マルクスやデュルケムとウェーバーとの比較を行いながら、社会学においてどのようなアプローチが可能か、そして現代においてこの問題をどう扱うべきか、非常に示唆に富んだ考察が行われた。とりわけ、東アジアの社会における近代化（特に中国と日本）と宗教的人生観との関係、イスラム社会における宗教と経済との関係、そしてアフリカにおける宗教と経済的な発展との関係など、具体的な事例を挙げて分析が行われた。ヴァイス氏の立場は、基本的にウェーバー的な立場であり、宗教と経済的・社会的展開とが対立的な関係になることがあっても、長い目で見ると、「社会の世俗化」はもはや後戻りできないプロセスであるという見解である。本学部教授山脇直司氏が、独自の立場から、さまざまな質問を行った。また、このような純粋に学術的講演会としては異例と言えるが、一般からも非常に多くの聴衆が参加し、熱心にメモを取っていた。

今回の来日では、他にもコロキウム「ハイデガーとグローバル化と故郷」および早稲田大学における講演会「知識人の終焉」が行われた。ハイデガー・コロキウムにおいては、ハイデガーがいう「現代人の故郷喪失」という問題をめぐって、「故郷」的なものがグローバル化の社会においてどのような意味をもちうるのか議論された。グローバル化の文化的コストとはなにかについて、ハイデガーをもとに考える試みであった。また、「知識人の終焉」では、ヴァイス氏は、21世紀のメディア社会においては、もはや社会の理念的リーダーとしての「知識人」は存在しえないという刺激的なテーゼを展開された。それにたいし日本の参加者から、ジョン・レノンや日本のロック・グループなどアイドル的存在が、かつての「知識人」としての役割を果たしているのではないかと、「知識人」という概念自体が20世紀的ヨーロッパの枠組みに縛られているのではないかと、という鋭い批判的質問があった。

DESK関係では、すでにドイツ・ピ

ーレフェルト大学教授オットハイン・ラムシュテット氏を招いて、「21世紀におけるヨーロッパ社会科学のありかた」という講演会を行った。ドイツ社会学は、伝統的に、社会を分析するのに、思想や文学や芸術などを含めた幅広い視点で問題を捉えてきた。経済と文化との密接な関係や、政治的なものを文化全体の中で位置づけるなど、こうしたドイツ社会学的スタイルは、ますます重要になっていくと思われる。

北川東子（超域文化科学専攻）

PINA IN KOMABA (ピナ・パウシュとの対話)

2002年5月15日(水曜日)

於： 東京大学駒場キャンパス
多目的ホール

ピナ・パウシュは、ウィリアム・フォーサイスとともに、現代のドイツのみならず世界を代表するコンテンポラリー・ダンスのコレオグラファーである。ピナ率いるヴッパタール舞踊団は

すでに何度も来日しており、さいたま芸術劇場、新宿文化会館その他で定期的に公演し、専門家にも、アマチュアにも、さまざまな領域、さまざまな角度から注目され、多くのファンをあつめている。ピナ・パウシュのインタビューや対話、記事もこの30年間数えきれないほどあり、今回も日本公演に関連してドイツ文化会館その他で、トークやビデオ/写真展など、多くの催しがなされた。

しかし、このような世界的な振付家とダンサーたちが大学のキャンパスにおとずれ、学生たちと交流し、大学内のホールで、至近距離でのダンスに接する場を実現するというのは、前例のないことである。当然のことながらいくつもの問題があったが、それだけの意義もあったと信じている。困難の一つひとつと、学内外のどれほど多くのひとたちから協力、助力を得られたかについて詳しく紹介する紙面にはないが、これが実現できたのは、いうまでもなく駒場が「ドイツ・ヨーロッパ研究」を謳うDESKというプロ



グラムをもっていたからであり、また日本文化財団の全面的な協力を得ることができたからである。しかしなによりも、「シャイな」ピナ・パウシュ自身が大学、および大学生との対話 ないしことばをこえた対話 に関心をもったからでもあり、これをとおして日本のひとつの文化に積極的に触れようとしたからにほかならない。このところ、ピナは世界各地をおとずれ、そこでの体験をインスピレーションとして作品が出来上がるということをシリーズとしており、近く日本でも、という計画があるそうである。今度の機会で、ピナはピナ特有のやりかたで、ある意味で言語よりも間接的な、ある意味では直接的な文化の体験をしつつ、いわば「身をもって知る」ことのひとつの射程を「身をもって」示してくれたといってもよいであろう。

5月15日の企画に備え、4月に入ってから毎週水曜日6時から8時半ぐらいまで、30名余の教養学部前期・後期課程、大学院の学生と、表象文化論の横山助手、DESKの協力教官、また学外からの熱心な参加者による準備会(勉強会)を計5回開き、またその前後にさまざまな打ち合わせをすすめた。第1回：4月10日6時～8時半(顔合わせ、30余名が集まり、自己紹介のほかビデオ一部鑑賞) 第2回：4月17日 プレヒトの「7つの大罪」のテキストについて高橋宗五先生のお話。「7つの大罪」のビデオ、ソングズのCDなど。第3回：4月24日 モリッサ・フェンレイ女史によるアメリカの現代ダンス&コレオグラフィーの現状についての講義、第4回：5月1日 ドイツのタンツテアターの背景についての解説、「ピナ・パウシュの世界」鑑賞、第5回：5月8日 「カフェ・ミュラー」鑑賞、ディスカッションといった内容であるが、その前後に時間をとって、学生の役割分担、ホールの舞台設営、ポスター、プログラムの作成、広報活動、ダンサーの世話、そして掃除等々さまざまな打ち合わせと作業を同時進行ですすめた。5月13日には準備会に出席していたほとんどの学生がさいたま公演「7つの大罪/怖がらないで」を見学した。14日は舞台設営等のため全員が時間の許す限り協力した。

当日の5月15日6時すぎ、ピナとダンサー18名、衣装係、テクニシャン等、



到着、多目的ホールの下調べののち、数理研究科の建物でウォーミングアップ、会場では300人をこえる学内、学外の参加者で会場内はぎっしりだったが、特に混乱もなくすんだ。6時からの予定のプレトークが大分遅れてはじまり、小林康夫教授(超域文化科学専攻) 佐々木健一教授(人文社会系研究科・美学藝術学) 内野儀助教授(超域文化科学専攻) 塚本明子(DESK、地域文化研究専攻)の4人で、約30分のピナをめぐる話でウォーミングアップ、それからピナと舞踊団の日本人ダンサー2名を迎えて対話にはいった。マイクの具合があまり良くなって、聞こえにくかったのは残念であるが、「緊張している」といいながらも、ピナは学生の質問を誠実にまた「発展的に」とらえて、たとえば、どんな作品が一番好きかという質問にも、自分にとって「一番好きな作品」はない、そのつど、世界からの働きかけにたいし、身をもって問いかけ、かつ応答してゆくことで、結果的に作品ができるのだから、という本質に触れるかたちで答え、また、ちょっとした日本人の仕草や姿勢につい

でのコメントも、身体による異文化接触にかかわるなど、「雄弁」であった。その後ピナのイントロに従って、ダンサーたちが「怖がらないで」「マズルカ・フォゴ」「ヴィーゼンラント」のそれぞれからの一部を披露してくれたのが、なんといっても圧巻であった。きわめてダイナミックなこの第3部におそらく参加者のすべてが満足したことであろう。終了後数理科学研究科棟のコモンルームでのパーティーでは学生たちがピナやダンサーと直に接触し、個人的に親睦を深めることができた。

ダンスを専門にしている学生も、初めてダンスに接した学生も、またさいたまに出かけてオーケストラやダンスのリハーサルを見学し、作品のできあがるプロセスに接する機会をあたえられた学生など、それぞれに受けたインパクトを翌週の水曜日(5月22日)の反省会で語り合った。現在私の手元にはプログラム残部数十部のほか学生の手による写真、ビデオの記録があり、また数名の学生の報告書も提出されている。

塚本明子(地域文化研究専攻)

辻井喬氏講演会

「ヨーロッパ文化受容の形について」

2002年7月16日(火曜日) 16:30-18:30

於: 東京大学駒場キャンパス
数理科学研究科棟大講義室

辻井喬氏にはすでにドイツ・ヨーロッパ研究室の発足時から、顧問の一人としてDESKの運営に力添えを頂いている。DESKの催しそのものへも参加をお願いしたところ、快諾をいただき、今回の講演会が実現することとなった。

前日から台風接近が予測され、交通機関の状況などが心配されたが、幸い直撃は免れ、当日昼までに天候も回復したこともあって、聴衆の出足はまずまずであった。学内外から200名近い人々が待ちうけるなか16時30分に開始。東京大学大学院総合文化研究科評議員、木畑洋一氏が研究科/学部を代表して挨拶。ついで、DESK運営委員長臼井隆一郎がDESKの紹介を行った。DESK顧問として堤清二/辻井喬氏を迎えるに至った経過、またそのことの意味が熱を込めて語られた。つづいて、司会による講演者の紹介の後、講演は開始された。以下にその要旨を略述する。

導入として辻井氏はまず、昨今の世界情勢の変化とこれに対する日本の対応を検討する。近代文化が大きな変革の時期を迎えつつある一方で、日本の国家は、この根本的変化の予兆を受け取るうとしないと。

氏は、まず注意深く、立場の違いにも配慮した言葉をもって、ブリュゲルの描いたパベルの塔の絵とこれに準えられる2001年の衝撃的な出来事とを



結びつける。アメリカ主導による汎世界的に価値を一元化しようとする動きがある一方で、これに対する世界の対応もまたおおきく動いていることを指摘。そのようなアメリカ型のグローバルイゼーションに対して、例えばEU(ヨーロッパ連合)を、そのアンチテーゼとして対置する。統一通貨によって経済は単一化されるにしても、言語の違いに象徴されるように、地域はそれぞれに独自性を発揮していくことを目指すと。氏は言語の立場からバベルの出来事に注目しつつ、(ものの考え方としての価値観をも含む意味で)言語の統一は人間的なことではないと、その意味を受けとめる。そしてそれは、明治以降の日本の政策、ことに言語政策に対する批判へとつながっていく。警察制度や、中央発券銀行、等々の近代国家の枠組みをワンセットとして自己にあてはめ、これによる発展を目指した明治維新以来の政策は、今でもその行き方を根本的には変えようとしていない。それは、例えば共通語志向に見られる日本人の言葉に対する考え方を深く規定している。

辻井氏は近年、詩人としての立場から、日本文学の衰微の問題について発言を繰り返して来た。過去に『万葉集』『源氏物語』『風姿花伝』と、古く長い伝統を持ってきた日本文学の現状が衰微していることは否定できない。それは、文学のみならず、芸術全般、また教育の問題であると。それは文化そのものの問題であるということであろう。今回の講演でも、氏は、詩人としての立場から現代の日本文化に詩の影響力が薄まっていることを指摘。そこに3つの問題があると言う。1、伝統との断絶。2、日常性に基づかない表現。3、思想性の消滅。この3点である。つづいて氏は、最初に指摘した明治以

来の日本の国威発揚の追求と、これに伴う国体の整備が実はこれに与っていることを跡づけ、そこに日本のヨーロッパ文化の受容の姿を重ねていく。

辻井氏はまず大国主命についての独自の解釈を提示する。古事記の中に描かれたその姿は実に多様で、それは本来、大国主命がそれぞれの地域性の神であったことを窺わせると。日本の伝統の根をそのような多様性に認めた上で、明治維新はそのような伝統からの切り離しと位置づける。維新以来の先人達は絶対王政のもとで富国強兵につとめ、そのために和魂洋才を掲げた。それは、そのような近代国家形成の3点セットを伝統に代わる価値として前面に押し出すことになり、そこで明治天皇はいわば、革命後の国家形成にナポレオンが果たした役割と等しく、中央集権化を助長する役割を演ずることとなったと。東京の言葉を口語共通語として方言よりも重視することは、そのような志向と通底している。それは経済・外交の必要上やむを得なかったかもしれないが、文学・文化にとっては、伝統・日常性からの切り離しを促進することとなった。辻井氏は、岩波新書『伝統の創造力』において、近代化の3点セットが目標として強調されていく過程で、伝統の内容がすり替えられ、狂信的な国粋主義・軍国主義が生まれたと分析している。

列強の仲間入りをするために憲法を制定し、形だけは整えたが、実際の歴史的・社会的状況と区別され、限定的にのみ輸入されたヨーロッパの制度は本当に根付くことがなかった。そして、和魂洋才を唱え、専ら技術のみを輸入するとはいつても、そのように文化と文明との差違すら曖昧にする状況で、文化とは西欧のことに他ならないという誤解が生まれたと、辻井氏は指摘す



る。例えば、日本には思想が無いと断ずる場合、思想とは輸入された西欧哲学の意味においてである。ヨーロッパ文化受容の過程で、日本の伝統の持つ独自の思想性が否定されることになる。辻井氏のこの指摘に従えば、国粹主義的な似非伝統と根無し草的な西欧への追従は軌を一にすることになる。

『伝統の創造力』において、辻井氏は、そのような思想風土からオリジナルな理論が生まれるはずがないと述べ、明治以来のそのような負の特性を担った我が国の文学作品は、歴史の動きや社会の変化を作品として描く構造を失っていると述べた。今回の講演でも、日常性に基づかない表現で嘘をついて作っても、文学は作り物に終わると率直に述べられた。文学は日常性・感性から切り離された場所で作るべきではないとも。その場合、氏が、日本の文学にも思想が滲えられていると繰り返し述べていること、また、感性は一方で美意識に行くとともに、もう一方で思想に行く、感性に基づかぬ思想は弱い、と述べ、西欧近代思想が知識として輸入されたことが、これを見失わせた原因ではないかと指摘していることも（西欧文化に関わる者としての自戒も込めて）銘記せねばならない。

『伝統の創造力』においては、皇国文化の崩壊した空白にアメリカ文化が容易に浸透した現代の状況が詳しく取り上げられている。本来の伝統と似非伝統との区別が付かず伝統と名の付くもの全てを捨てた状況が批判される。今回の講演では時間の関係で余り触れられなかったが、和魂洋才に取って代わった現代の状況を「実利魂洋才」と呼び、便利さが文字の制限にまで及ぶ状況が痛烈に批判された。21世紀の産業社会における文化創造と日本人の感性の再構築についての提言については、次の機会が待たれる。

講演の後、聴衆からの質問を受けて質疑の時間がもたれた。18時30分終了。機知に富んだ話と充実した内容の2時間であった。試験期間直前で、学生の参加が比較的少なかったのが残念である。学外からは、日本現代詩人会、日本詩人クラブから多くの参加者があった。会場受付では『わたつみ』『呼び声の彼方』『深夜の孤宴』など、辻井氏の著書が展示販売された。

川中子義勝（超域文化科学専攻）

東京ドイツ文化センター・DESK 共催サッカー・シンポジウム

グローバル・キック 異文化体験としてのサッカー・ ワールド・カップ

2002年5月25日(土曜日) 13:30-20:00

於: ドイツ文化会館ホール

今年は韓国・日本共催のサッカー・ワールド・カップが開催され、ブラジルの優勝、ドイツの準優勝で幕を閉じた。今日のヨーロッパや中南米を考えれば、サッカーというスポーツはすでに単なるスポーツという枠をとうに越え、いかなる政治政党も実現できない政治的効力を発揮している。サッカーは本来的に郷土愛やナショナリズムを楽しむスポーツであり、その一線を越えれば戦争でも騒動でも引き起こしかねないのは世界の事例が示す通りである。また、サッカーという競技の特質がテレビ・ラジオのメディアと深々と結びついており、放映権を獲得した会社の帰趨がその国の政治動向を左右しかねないものにもなっている。DESKは東京ドイツ文化センターと共催で、このようなサッカーを、一旦、サッカーそのものの戦術論のピッチを離れて、文化的政治的現象として考えてみる試みを行った。

まず渡辺融東大名誉教授に蹴鞠についての講演を頂いた。ボールを蹴る遊びとしてのサッカーの起源をひもとくとアジア（中国・朝鮮・日本）の蹴鞠に行き当たる。が、その蹴鞠とはどのようなものであるかを具体的に知る人は少ない。蹴鞠は、サッカー同様、ある種の強固な仲間意識を育て、その仲間は例えば大化改新などを引き起こしたものである。源氏物語の若君たちがもし蹴鞠がうまければ、ベッカム並の好感度で宮中の女房たちに迎えられたものなのか。韓国・日本で行われるサッカーにふさわしい講演であった。

シンポジウムは前後半に分け、前半は「サッカーとマスメディア」

- ・「サッカー・ジェンダー・メディア消費 日本とドイツの視聴率比較」
上智大学講師桑川麻理生氏
- ・「サッカー・テレビ・技術」
ポーフム・ルール大学映画・テレビ研究所研究員ラルフ・アーデルマン氏ならびにマルクス・シュタウ

フ氏。

- ・「サッカーとリスク資本主義」
ポーフム・ルール大学映画・テレビ研究所研究員で歴史学者ライラー・フォーヴェ氏。

パネル・ディスカッションには『ごめいわくギャルス』や『OL狂騒曲』の漫画家岡田がる氏が加わった。

司会東京大学講師ウルリヒ・ハインツェ。

後半は「サッカーとコレクティブ・アイデンティティ」。

- ・「グループ・テクノロジーから見たサッカー戦術の歴史の変遷」
大阪大学工学教授熊谷貞俊氏
- ・「ポストモダンのサッカー アイデンティティ・自己世界・備品化」
ゲッティンゲン・スポーツ科学研究所教授アント・クリューガー氏
- ・「サッカーと地域社会」
日本経済研究所調査第二部長傍士銚太氏
- ・「国民のシンボルとしてのサッカー
ブラジルの場合」
東京工業大学教授細川周平氏
司会白井隆一郎。

多岐に渡るシンポジウムであったが、全体は「グローバル・キック」とある通り、サッカーのどの部分を取り上げた報告にせよ、グローバリゼーションとの関係が蹴飛ばしたい位、出てくる。サッカーとグローバリゼーションと言えば、メディア、貨幣、情報、ポストモダン、肉体を資本とする選手の商品化等々である。むろん、グローバリゼーションの問題は常に地域の問題でもある。

サッカーという文化現象を通して見えてくるのは、日本という国家がいかにも中央集権国家を目差し、それを現在そのままに引き継いでいるかである。思い起こしてみると明治日本が岩倉米欧使節団を送り出したのは、イギリスではすでに国家規模のサッカー協会が成立した時期であった。使節団はヨーロッパの強さが鉄鋼と石炭にあること、文明開化と富国強兵の実質を担うであろう社会インフラが駅と鉄道にあることを見抜いた。残念ながら使節団はまさにこの時代に全ヨーロッパの広がり、文明開化と富国強兵の実質を担うであろう社会インフラが駅と鉄道にあることを見抜いた。残念ながら使節団はまさにこの時代に全ヨーロッパの広がり、文明開化と富国強兵の実質を担うであろう社会インフラが駅と鉄道にあることを見抜いた。残念ながら使節団はまさにこの時代に全ヨーロッパの広がり、文明開化と富国強兵の実質を担うであろう社会インフラが駅と鉄道にあることを見抜いた。

えた使節団である。サッカーどころではないのは無理もない。しかしサッカーというスポーツはいかに華麗な足技を強調するにせよ、その飛躍的流行の土台には鉄道網の発達があり、その上に立脚してはじめて、エスニックな郷土愛を前提にした都市対抗としてのサッカー熱が急上昇したのである。サッカーは「労働者のスポーツ」と言われるが、その労働者はすでに鉄道で各都市を応援に駆けつける時間的経済的余裕を有していたのであり、それこそ明治日本の求める富国強兵と文明開化の象徴的存在だった筈である。

使節団はヨーロッパと日本の文明差をおよそ40年と算定した。工業技術が飛躍的に拡大した年月として見る限り、この数値に大した誤りがある訳ではない。この40年の時間差を埋めるためにひたすら日本は努力してきたと言ってもよいであろう。そして遂に日本は韓国共々サッカー・ワールドカップを開ける所まで来たのである。日本はヨーロッパのキャッチ・アップに成功した。こんな思いが社会を覆う現時点、サッカーを介して改めて明らかになったことは、「日本ほど都市機能を一極に集中した中央集権システムをとっている国はない」(傍士銑太氏)ということである。

サッカー文明のためにはそれぞれの都市が独立不覇でなければならない。今、EUをはじめ、世界的に問われているのは、(多分、ブッシュのアメリカは別にして)国家の競争力ではなく、地域そのものの持つ競争力である。ところが日本では「地方」は「地方」、下手をすると過集権国家の「地域興し」の対象である。そこに世界サッカーを

持ってきたのである。札幌、宮城、茨城、埼玉、横浜、新潟、静岡、大阪、神戸、大分の10会場。東京が見えないのがなんとも新鮮である。しかしこれもいかにも付け焼き刃であったことは、例えば宮城のスタジアムが日本のスタジアムであるにもかかわらず、新し過ぎて日本選手にとってフランチャイズとしての機能を果たせず終わったのを考えてみればすぐ分かる。サッカー・ナショナリストはこのような事態を許したくないだろう。中央集権と地方分権。この観点から見た日本の遅れはもしかしたら40年よりも長くなっている。ブルーなのはナショナル・ジャパンの色だけではない。

グローバル化時代のサッカーに関わるナショナリズムと郷土愛は一考に値する。ナショナル・チームの編成のために世界中に散らばっている有力選手をひっかき集めて、「こんな機会でもないと思ったに見ない国歌と国旗」(クリューガー氏)と共に国威を発揚するかと思うと、一方では自分の町の選手は東欧やアフリカの出身者ばかりで、ドイツ人の選手は一人もいないにもかかわらず、おらが町のサッカー・チームに血道を上げるドイツの例えばコトブス市民。

「異文化体験としてのワールド・カップ」の一方の目的は、自文化の異質性に自覚的になることであった。ワールド・カップ開催一週間前に強行したサッカー・シンポジウムはいささか時期尚早であったかもしれない。参加者およそ110名。次はドイツである。抜かりなく用意したい。

臼井隆一郎

(DESK運営委員長・言語情報科学専攻)

「国際化時代の学術研究 日独協力の可能性」フォーラム

2002年7月2日(火曜日)
於: ドイツ文化会館ホール

2002年7月2日、東京都港区赤坂のドイツ文化会館ホールにおいて、ヨハネス・ラウ、ドイツ連邦共和国大統領を迎え、同国大使館の後援を得て、日独学術関連団体共催による、上記表題のフォーラムが催された。共催者には、ドイツ学術交流会(DAAD)、アレクサンダー・フォン・フンボルト財団(AvH)、ドイツ研究協会(DFG)、大学学長会議(HRK)が名を連ねた。「東京フォーラム」と題されたが、それは、前日の7月1日、同名同趣旨の「京都フォーラム」が、開かれていたからである。「東京フォーラム」には、東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究室DESKも協力という形で参加した。しかし、当日プログラムに「本フォーラムは、ドイツ学術交流会(DAAD)の支援により東京大学に開設されたDESK(ドイツ・ヨーロッパ研究室)の正式発足を記念して開催されるものです」と謳われていたように、DESKにとってもこのフォーラムは重要な意味をなす節目と位置づけられ、準備段階から当日運営に至るまで様々な形でこれに寄与した。まず開会にあたって、ウーヴェ・トーマス(ドイツ連邦教育・研究省事務次官)、青江茂(文部科学省審議官)、クリスティアン・ボーデ(ドイツ学術交流会事務総長)の諸氏が挨拶。続いて東京大学総長佐々木毅氏がDESK開設について挨拶を述べ、さらにDESK運営委員長臼井隆一郎がDESKの活動を紹介した。

続いて、午前、午後と討論・報告が行われた。そのドイツ側参加者は、ハルトムート・クレプス(ノルトライン・ヴェストファーレン州教育研究省事務次官)、ヴォルフガング・ヴァールスター(ザールブリュッケン・ドイツ人工頭脳研究センター長)、マンフレート・オステン(フンボルト財団事務総長)、クリスティアン・ボーデ(前出)、ハンス・ヨアヒム・クワイサー(シュトゥットガルト・マックス・プランク固体研究所)、クリスティアーネ・ニュスライン=フォルハルト(テュービンゲン・マックス・プランク発達生物学研究所、1995年ノーベル賞受賞者)



左から細川周平、傍士銑太、アント・クリューガー、ウルリヒ・ハインツェ、臼井隆一郎・熊谷貞俊の各氏。

DAAD事務総長クリスティアン・ボーデ氏駒場訪問

2002年7月3日(水曜日) 14:30-16:30



挨拶するラウ大統領



ドイツ連邦共和国大統領ヨハネス・ラウ氏



DESKがDAADの援助によって設立されてからほぼ1年、かねてから懸案であったDAADボーデ事務総長の駒場訪問が実現した。日独学術団体(DAAD ドイツ学術交流会、AvHアレクサンダー・フォン・フンボルト財団、DFG ドイツ研究協会、HRK大学学長会議、DESK東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究室) 共催によるフォーラム「国際化時代の学術研究 日独協力の可能性」(東京フォーラム)が幕を閉じた翌7月3日、ボーデ事務総長はDAADの日本担当ウルズラ・トイカ=フONG女史とエジプシャン女史、DAAD東京事務所のウルリヒ・リンス所長とメヒトヒルト・ドゥッベル=タカヤマ女史共々、総勢5名で午後2時半、駒場に到着、早速、古田元夫学部長を表敬訪問した。学部長室で木畑洋一評議員を交えて30分ほど歓談した後、学部長評議員共々、数理科学研究科会議室に場所を移し、DESK運営委員およびドイツ語教室の有志との話し合いに入った。

一度、自由かつ率直にお互いの希望を述べ合いたいと前もって決めていただけに、相互の率直な見解が交わされる会談となった。ボーデ事務総長は世界の有数大学に設置されたドイツ・ヨーロッパ・センターを展開する近年のDAADの学術政策を説明し、DESKもその将来像をそれに沿ったものとなることを強く希望し、特に大学院修士段階で現在のドイツ・ヨーロッパ研究を推進できる学術援助母体としてDESKが機能することに強い要望を出した。DESK側はDAADの要望は無論よく了解できるものの、日本の大学制度はドイツやアメリカのそれとは同じではなく、ドイツ側でもその理解が必要であると述べた。また、東京大学は現在、

ハルトムート・ヴォイレ(カールスルーエ大学教授)、ヴァルター・ツィンマーリ(ヴォルプスブルク・フォルクスワーゲン・コーチング社オート・ユニバース校長)、ヨアヒム・イエンス・ヘッセ(ベルリン自由大学)、イルメラ・日地谷=キルシュネライト(ドイツ・日本研究所所長)。日本側は、石井紫郎(総合科学技術会議議員)、佐藤禎一(日本学術振興会理事長)、三島憲一(大阪大学教授)、村上淳一(桐蔭横浜大学学長)、野依良治(名古屋大学教授、2001年ノーベル賞受賞者)、松本和子(早稲田大学教授)である(以上、登場順、敬称略)。

「日独両国における学術研究の国際化を目指して」と題された午前の討論では、日独の研究体制の現状についての報告や、相互に利用できる機関や技術の具体的な紹介がなされ、両国の交流の将来像が探られた。午後の第1部はまず、「ドイツの先端研究紹介」と題して、自然科学、工学、人文科学、社会科学の諸分野について報告が行われた。第2部では、冒頭にヨハネス・ラウ大統領が到着され、挨拶された。大

統領は、学術研究の日独協力において、東京大学にDESKが開設されることの意義の重要性についても言及された。そののちこの日のまとめとして「官・学・民の日独協力のために」と題し、「学者はどう貢献できるか」をめぐる討論が重ねられた。

当日は、会場に溢れるほどの参加者を得、熱心な議論が重ねられた。その後のレセプションも盛会であった。昼休みには、以降4日間にわたって催される「ドイツにおける勉学・研究」をテーマとした情報提供展示の開設式が行われた。

川中子義勝(超域文化科学専攻)



大学独立行政法人化を見据えた中期計画を作成中であり、その将来構想におけるDESKの位置付けを説明した。

ボーデ事務総長は最後に、現在、DESKはDAAD事務総長と東京大学大学院総合文化研究科との間の合意に基づいてその活動を行っているが、DAADとしてはこの合意をなるべく早くDAADと東京大学との間の契約にしたいとの要望を表明した。

いくつかの問題点はボーデ事務総長の帰国後、速やかに処理されることになると予測される。

臼井隆一郎

(DESK運営委員長・言語情報科学専攻)

研究誌

「ヨーロッパ研究」創刊

「ドイツ・ヨーロッパ研究室」(通称DESK)は2000年10月に正式に発足しました。その前後から研究成果を発表する場として「紀要」に類するものが必要であろうという認識は運営委員の中にあり、幾度か議論を重ねた結果「紀要」を出すことになり、今年(2002年)の春に創刊号を世に送り出すことができました。

しかし、この「紀要」の性格については必ずしも運営委員全員の間で共通の認識がある訳ではありません。DESKそのものが東京大学で初めての寄付講座であり、寄付講座が出す紀要不いしはジャーナルが必ずしも従来の紀要である必要はないのではないかという認識は多くの運営委員に共有されていますが、では従来の紀要ではない紀要とは何かという話になりますと、共通の認識がある訳ではありません。従来の大学の紀要は、大学に籍を置く教師が研究成果を発表する場でしたが、DESKのように実業界や官界、或いはジャーナリズムの世界で専門的な技能や知識を生かして活躍できるドイツとヨーロッパの専門家を育てることを設立の主要な動機としている場合、教師が書くだけでよいのか、誰が読むのか、どのような読者を想定するのか等様々な問題がでてきます。市販できるような内容と水準のジャーナルの刊行を検討したこともありましたが、採算やその他の技術的な問題(法律上の問題や発行や編集に伴う仕事の負担の問題など)から断念せざるを得ませんでした。こうし

た訳で結局「ヨーロッパ研究」は従来の紀要に近いものになりました。

しかし「ヨーロッパ研究」の創刊号を手にとってご覧になった方はお分かりだと思いますが、創刊号に寄稿くださった方々は駒場で教鞭を取る先生方だけでなく、外国の先生方も含まれています。社会学のラムシュテット教授(ビーレフェルト大学) 政治学並びに国際関係論のザイデルマン教授(ゲーセン大学) 安全保障と軍事問題の専門家でいらっしゃるフォースターさん(ロンドン大学並びにイギリス統合指揮幕僚大学)は、駒場で講演やコロキウムをされたり、或いはシンポジウムに参加なさいましたが、編集部はその原稿を頂戴いたしました。今後もこの方針は維持し、DESKが主催した様々な講演会やシンポジウムでの講演原稿等は積極的に「ヨーロッパ研究」に掲載する予定です。これによって執筆者が多様になり、国際性を得ることになります。無論こうした原稿はヨーロッパの諸言語で書かれていますから、言葉の上でも国際性を得ることになります。

それからこの紀要のもう一つの重大な特徴は院生の皆さんにも門戸を開き、執筆の機会を与えていることです。毎年春に執筆要領を公表していますが、東京大学大学院総合文化研究科に籍を置く大学院生で、その論文の内容がヨーロッパの政治、経済、社会、歴史、文化にかかわるものであれば「ヨーロッパ研究」に発表することができます。院生の皆さんが提出なされた原稿は三人以上の専門家に目を通して頂いて採否を決めるレフリー制を採用しています。自信のある院生のかたは是非応募してください。

因みに創刊号の内容をここにご紹介しておきます。

I. 論文

1. Sozialwissenschaften in und über Europa am Ende des XX. Jahrhunderts
..... Otthein Rammstedt
2. Problems and Prospects of the Common Foreign and Security Policy (CFSP) and European Security and Defence Policy (ESDP). A German View
..... Reimund Seidelmann
3. A British Perspective on the Problems and Prospects of the

Common Foreign and Security Policy (CFSP) and the European Security and Defence Policy (ESDP)
..... Anthony Forster

4. ドイツ緑の党の苦悩 「反政党的政党」から連立与党への変遷とその諸問題
..... 井関正久
5. Leonardo Bruni's Cicero Novus
..... Yasunari Takada
6. On the Conception of Politics of the Praxis Group: Exposing the Limits of its Universalism
..... Rei Shigeno
7. ソヴィエトスローガンの詩学
..... 高橋健一郎
8. ナチ強制収容所における囚人強制労働の形成
..... 増田好純
9. イタリア欧州統合への対応: 1992~2001 移行期におけるテクノクラート、政党、社会アクター
..... 八十田博人
10. ヴェルデュラン夫人の「音楽の殿堂」 シャンゼリゼ劇場をめぐるブルーストにおける外国文化の問題に関する一考察
..... 芳野まい

II. 活動報告

ご覧のように「ヨーロッパ研究」に掲載される論文執筆者の専攻分野は多岐にわたり、研究者の視点からすると、この紀要は pot pourri (ごった煮)であるとの印象を拭えないかもしれません。しかしヨーロッパという地域やその国々を理解しようとした場合、様々な様相を呈してきます。文化は政治や経済と無関係ではありませんし、また政治や経済はその国や地域の歴史と切り離して理解することはできません。また政治研究であれ、経済研究であれ、特殊な場合を除いてある国の政治や経済が対象になるのが通例ですが、この「ヨーロッパ研究」ではそうした国を隔てる垣根は取り払われています。その道の専門家が隣の国のことについて知らないことのほうが多いのですが、「ヨーロッパ研究」は通常出会わないものや、出会うはずのないものが出会う機会を提供する場でもあります。そうした異質なものの出会いから何か新しいものが生まれたり見えてくるかもしれません。

それは一つひとつの論文の内容や質とかかわるだけでなく、「ヨーロッパ研究」を手に取り読んでくださるみなさんによるところ大であるとも言えます。

「ヨーロッパ研究」はいわば産声を上げたばかりで、今後どのような紀要に育って行くのか編集担当者にも皆目見当が付きません。どうか多くの優れた論考と批判的なご意見をお寄せください。

高橋宗五（超域文化科学専攻）

現代史フォーラム

DESK現代史フォーラムは、東京大学駒場キャンパスにおけるヨーロッパ研究、とくにヨーロッパ現代史研究をいっそう活性化しようとする試みです。欧州統合史が中心ですが、全体主義の歴史、冷戦とその克服過程、マイノリティ問題、歴史教育、戦争と暴力の記憶など関連する諸テーマにも取り組んでいます。日欧の研究交流だけでなく、中国、韓国など東アジアの研究者との交流にも力点をおき、東アジアという新たな視点から現代ヨーロッパを論じています。

2001年2月28日にフライブルク大学ウルリヒ・ヘルベルト教授をお招きして研究交流会（DESK Newsletter, No.2に参加記あり）を行ったのが、このフォーラムを立ち上げるきっかけとなりました。以下、各回の報告者とテーマを紹介します。

第1回 2001年6月6日

8号館306号室 17:30～20:00

星乃治彦氏

（熊本県立大学文学部 教授）

伝統と「モデルネ」

バウハウスをめぐって

第2回 2001年11月28日

8号館306号室 18:00～20:30

水野博子氏

（大阪大学言語文化部 専任講師）

オーストリアにおける「記憶の文化」形成について

「記憶の場」としてのマウトハウゼン元強制収容所跡を中心に

第3回 2002年2月9日

8号館306号室 16:00～18:00

熊野直樹氏

（九州大学法学部 助教授）

ヨーロッパにおけるドイツの20世紀ある反西欧の近代の政治社会史

第4回 2002年4月13日

8号館306号室 14:00～16:30

田村栄子氏

（佐賀大学文化教育学部 教授）

ナチズムと女性医師（本号掲載の参加記参照）

第5回 2002年7月13日

8号館306号室 15:00～18:00

第1部

Wolf Gruner氏

（ベルリン工科大学反セム主義研究所）

ナチ体制下の「アーリア化」

（Arisierung）をめぐる諸問題

第2部 院生研究交流会

斎藤淳氏 オーストリア・アイデンティティの将来

安田麻紀氏 現代ドイツの歴史教育

増田好純氏 強制収容所システムとホロコースト

磯部裕幸氏 植民地支配と「熱帯医療」

石田勇治（地域文化研究専攻）

「ナチズムと女性医師」参加記

（2002年4月13日）

第4回フォーラムは、佐賀大学から田村栄子教授を迎えて行なわれた。田村氏はドイツ教養市民層をナチズムとの連関において分析する研究で高い評価を受けており、ヴァイマル期からナチにいたる青年運動、学生運動の右翼的な潮流について社会史的な視点からまとめた著書『若き教養市民層とナチズム ドイツ青年・学生運動の思想の社会史』はドイツ現代史を学ぶ者の必読の書である。今回は教養市民層の中でもとくに女性医師をテーマとして取り上げ、ヴァイマル期にその職業組織として結成された「ドイツ女性医師同盟」の社会衛生問題に対する取り組み、ナチ政権下での組織の変質などについて報告が行なわれた。

「ナチズムと女性医師」というテーマは、ドイツ現代史に対する田村氏の多岐にわたる関心が集約されたテーマであるといつてよい。その一つは「ナチズムと女性」についての問題意識である。田村氏は、女性医師のあいだにかなりの割合で存在したユダヤ系がナチ

期には排除され、「ドイツ女性医師同盟」もナチへの同意を規約に取り入れていくこと、ナチ体制下で女性医師はいったんは職業活動を制約されるがナチの拡充した政策の中で働く機会をえていくこと、女性医師のナチ党員の比率が男性医師の半分以下であることなどを示しながら、ナチ体制下での女性医師の位置を明らかにしていった。これは、近年ドイツ現代史研究者のあいだで論争となっている「女性はナチ政権下で加害者であったか被害者であったか」という問題に対して、二者択一にとどまらない精緻な回答を模索する試みである。田村氏は質疑応答の中でも、この問題について一つの明瞭な答えは用意されえず、慎重な検討が必要であることを強調した。

田村氏のいまひとつの関心は「ナチズムと優生学」にある。優生学は、ナチ政権下で人種主義と結びつき、障害者に対する強制断種、不妊手術、さらには安楽死政策へと発展した。田村氏は、優生学の合理的近代科学としての側面のみを強調する考え方に対して、優生学を近代への批判を内包した「文化批判」の潮流に近づけて見ることを主張する。そしてヴァイマル期の「ドイツ女性医師同盟」も母性主義フェミニズムに見られる文化批判的思潮と関係していたとして、女性医師は近代科学の発想ではなくむしろ近代市民社会の矛盾を批判する理念から優生学を受容していったのではないかと指摘した。

優生学をめぐるこの議論はより大きな問題と関連している。つまり、優生学をめぐる田村氏の問題提起は、ヴァイマル期とナチ期を近代の暗黒面における連続性においてとらえ、ヴァイマル期をナチ期の単なる前史とみなすドイツ現代史の風潮に対する異議申立てなのである。田村氏は、ヴァイマル期を前近代的、近代的、近代批判的な価値のせめぎあいの時代ととらえ、その政治的、社会的、経済的、文化的状況の中でナチズムへと流れ込んだものの中には学問や社会の現状を批判的に検討しようとする方向性があったことも指摘する。そのような近代の解放面と暗黒面の双方をよく示す存在が女性医

師なのである。女性医師が受容したような社会状況の変革を指向する社会衛生学と遺伝的な要因を重視する人種衛生学という優生学の中の二つの潮流の差異をどこまで強調すべきかについては参加者の中でも議論が分かれたが、ナチの前史としての単純化されたヴァイマル解釈の妥当性を問いなおす田村氏の問題提起は説得的であり、多くの共感をえた。

多様な論点を意欲的に提示し、女性医師という個別テーマについて扱う中から、ヴァイマル論、近代論へと大きく論を展開していく田村氏の報告は刺激的であり、質疑応答の中ではドイツのみならずイギリス、日本の問題にまでも議論がおよぶ有意義な会となった。

川喜田敦子

(地域文化研究専攻博士課程修了)

DESKチュートリアル 活動について

(2001年度冬学期 / 2002年度夏学期)

2001年度冬学期のDESKチュートリアルでは、ユーロ導入と欧州安全保障といったアクチュアルな問題を中心テーマに取り上げた。ユーロに関しては、ドイツ人経済学者とベルギー総領事をゲスト講演者として招き、ユーロ導入に至るプロセスとその効果に関して議論を行った。また、9月11日の同時多発テロ以降重要性を増した安全保障問題については、フランス、イギリスの外交官による講演会を企画した。そのほかにも、スウェーデン外交官、トルコ外交官、木村元大使による講演と学生報告(加藤優子「フランス語学留学について」)を行った。

ユーロに関しては、まず2001年10月30日に、ドイツ人経済学者M・シュルツ氏(富士通総研経済研究所)による講演「ヨーロッパ経済通貨統合 - ユーロの行方」を開催した。ベルリン自由大学をはじめ世界各地で教鞭をとったシュルツ氏は、ヨーロッパ経済通貨統合からユーロ導入に至るプロセスに関する詳細な解説を行った。テーマは、欧州経済共同体EECから欧州通貨同盟EMUへの発展、マーストリヒト条約(ミクロ経済的調和からマクロ経済的安定へ)、さらにEU各国の経済情勢まで及んだ。プロジェクターを用いて行われたプレゼンテーションでは、表・グラ

フを通して、複雑な経済理論がわかりやすく紹介された。講演は、ドイツの大学の授業で行われるように学生との対話方式で進み、EUにおける経済・金融政策、ユーロ導入の際の問題点などに関して、活発な議論が展開された。

さらに2001年12月7日、ベルギー総領事D・ヴァン・エークハウト氏による講演「ヨーロッパとユーロ - ベルギーの視点から」を行った。ヴァン・エークハウト氏はプロジェクターを用いて、欧州統合の歴史からユーロの理念までを詳説するとともに、ヨーロッパの心臓部に位置し、常に戦場であったベルギーの歴史・文化・言語などについても言及した。また、ユーロ紙幣・硬貨も紹介し、デザインについて説明した。ヴァン・エークハウト氏は、EUを平和と繁栄のプロジェクトと位置づけ、ユーロの経済的側面だけを議論することは十分ではなく、欧州の政治的統合のために果たす役割を見ていかなければならないと語った。このほかにも、2001年下半年EU議長国として、ベルギーがどのような対EU政策を実践しているのかなどについて議論が展開された。

欧州安全保障に関しては、まず2001年11月27日にフランス大使館からJ・F・カザボンヌ=マゾナーヴ氏(書記官)とP・グラヴィエ(アタッシュ)を招待し、「新しい欧州安全保障に向けて - フランスの視点から」をテーマに講演会を開いた。ここでは、9月11日同時多発テロ事件後のグローバル安全保障のあり方が議論の中心となった。その際、テロ事件に対するフランス政府の対応や対アフガン政策から、フランス内でのテロの経験、フランスにおけるムスリム系住民、フランスと旧植民地諸国との関係に至るまで、さまざまなテーマについて議論が展開された。グローバル化の負の側面として、犯罪



スウェーデン外交官講演
(N・マシアス氏左とC・尾崎=マシアス氏)

のトランスナショナル化とテロ組織への資金流入という問題が取り上げられる一方で、国際NGOの活動や、テロ対策における国連・G8・EU間の連携といった、グローバルな協調行動についても言及された。最後にトピックは人権問題へ移り、民族紛争やテロの中で、どのように人権を保護していくべきかについて議論された。

続いて2001年12月4日には、イギリス大使館書記官S・ブラウン氏による講演「欧州統合とイギリス - 英国外交政策を中心に」を開催し、9月11日後の欧州安全保障を中心テーマに学生と議論した。ブラウン氏は、まずイギリス外交史を概観し、第2次世界大戦後のヨーロッパ諸国との関係やアメリカとの関係について詳説した。さらに現在のブレア政権の対EU政策について、EU拡大、共通安全保障政策を中心に解説した。そして、ユーロ不参加の問題にも触れ、ブレア政権があげたユーロ参加の条件や、将来のEU構造改革へのヴィジョンについて語った。

その他にも、EU拡大をテーマに個別講演も実施した。2001年11月13日にはC・尾崎=マシアス(スウェーデン大使館書記官)、N・マシアス(元EU理事会スウェーデン代表)夫妻を迎え、「スウェーデン - 2001年上半年期EU議長



ベルギー総領事(D・ヴァン・エークハウト氏)



ドイツ外交官講演
(G・シュミット氏)



チェコ大使講演
(K・ジェブラコフスキー大使)



駐日欧州委員会代表部講演
(E・マッシューズ氏)

国としての総括」をテーマに講演会を開いた。まずN・マシアス氏がOHPを使用してEU各機関の役割について解説するとともに、理事会における議長国としての活動について自らの経験を交えて紹介した。次にC・尾崎＝マシアス氏が、スウェーデンのEU加盟とユーロ不参加の背景について解説し、EU拡大・雇用・環境問題を中心に、議長国としての成果について総括した。

EU拡大問題に関しては、さらに2001年12月11日、トルコ大使館書記官T・オズチュハダル氏による講演「トルコから見た欧州統合」を開き、これまでとは異なり、EU外部の視点から批判的な議論も行った。オズチュハダル氏はビデオを用いてトルコを紹介した後、第1次世界大戦以後のトルコ事情について触れた。特に50年代末からの欧州との関係に焦点を当て、ギリシアとの関係やクルド人問題、キプロス問題、97年ルクセンブルク欧州理事会から99年ヘルシンキ欧州理事会までのトルコ・EU間関係の変化について解説した。さらにEU加盟交渉国としての今後の政策方針課題についても説明した。

2001年度冬学期最後のチュートリアルでは、元駐独大使である木村敬三氏を迎えて講演「欧州の中のドイツ - ドイツ統一から現在まで」を開催した。木村元大使は、80年代末の旧東ドイツ事情からドイツ統一問題まで、自らの現地での体験を交えて詳細に解説した。その後、ドイツ人の国民性から、過去の取り組みにおける日独比較、統一ドイツの外国人問題に至るまで、幅広いテーマについて議論が展開された。

EU拡大は、2002年度夏学期のチュートリアルでも中心テーマに取り上げた。夏学期は、外務省欧州局、ドイツ大使館、フィンランド大使館、欧州委員会代

表部から外交官を、さらには駐日チェコ大使を招いて講演会を開催した。このほかにも院生報告(吉田徹「ヨーロッパのフランス、フランスのヨーロッパ」)と学生報告(阿部弘和・大谷壮史「フランス語学留学について」)を行った。

2002年5月7日に行った外務省欧州局の花田貴裕氏による講演「EU拡大と東欧現代事情」では、中東欧の歴史から冷戦期の東欧事情、現在のNATOの役割、そして中東欧諸国とEU、アメリカ、日本、ロシアとの関係などが取り上げられた。花田氏は日本の外交政策についても詳説し、日本にとっては「遠い」と見なされる中東欧諸国が、日本とEUあるいはロシアとの関係において果たす役割が大きい点を指摘した。また、中東欧諸国がEUのみならず日本との関係も重視している点についても触れた。

夏学期には、EU拡大のほかにグローバル環境問題も扱った。2002年5月14日、ドイツ大使館書記官G・シュミット氏を迎えて、「ドイツ環境政策」について講演会を開催した。シュミット氏は、京都議定書の内容を紹介するとともに、世界各国のCO₂削減の推移について解説した。またドイツにおける環境税導入とその成果を分析し、省エネ政策や代替エネルギーの可能性、脱原子力発電の実情、ロシアからのエネルギー供給、環境教育やエコロジックな生活スタイルのあり方などについても、学生との間で議論が展開された。

2002年5月28日には、EU加盟に最も近い国の一つチェコについて議論するために、チェコ大使館からK・ジェブラコフスキー大使を迎えて「チェコ共和国と欧州連合」をテーマに講演会を開いた。ジェブラコフスキー大使は、まずEU加盟条件を示す「コペンハーゲン基準」について解説し、2004年にチェコのEU加盟が実現する見込みについて語っ

た。次にチェコの地理と歴史について触れ、89年の「ビロード革命」と、その後のスロヴァキアとの分離、民主化・市場経済化プロセス、NATO加盟などについて詳説した。その後、チェコとEU・日本との経済関係、現在の対ロシア関係、チェコにおける教育問題、ロマ人の問題について議論が展開された。

続いて、北欧の視点からEU拡大を議論するために、2002年6月11日にフィンランド大使館からN・リンデルツ書記官を迎えて講演「フィンランドの対EU政策」を開催した。リンデルツ氏の講演はプロジェクターを用いて行われ、冷戦期におけるフィンランドの中立外交、EU加盟の背景、EU拡大政策について詳しく解説された。リンデルツ氏は、フィンランドが99年下半期議長国としてEU拡大において果たした役割や、他の北欧諸国と異なりユーロに参加した理由について解説するとともに、欧州共通安全保障政策、EU構造改革の展望などについても説明した。学生との議論においては、例えば、フィンランドの日本に対するイメージ、対バルト三国・対ロシア関係、フィンランドにおけるIT産業の発展や農業問題、エネルギー政策、安全保障政策がテーマとなった。

2002年度夏学期最後のチュートリアル(2002年6月25日)では、EU拡大に関する議論の締めくくりとして、駐日欧州委員会代表部からE・マッシューズ書記官を招待し、EUの政治に関する講演会を開催した。マッシューズ氏は、単なる自由貿易圏でも合衆国でもないIEUの特徴と理念について、第2次世界大戦後の欧州統合プロセスに沿って解説した。さらに、EU内における文化の多様性の維持、ユーロ導入、環境や安全保障といった共通政策について触れ、トルコも含めたEU拡大を「EU最大の挑戦」と位置づけた。学生との議論では、

EUにおける「民主主義の赤字」という問題が最大の焦点となった。ここではおもに、政策決定におけるトップダウン方式やエリート主義といった一般的批判に対して、民主的正統性という問題を解決するために、EUにはどのような構造改革が必要であるかについて議論された。

DESKチュートリアルでは今後も引き続き、欧州事情の専門家による「欧州統合とEU拡大」をテーマとした講演会と、学生報告・院生報告を並行して行っていく予定である。

井関正久 (DESK)

助成金成果報告 フランス語語学研修を終えて

この度、DESK奨学金より援助をいただき、フランスにて2週間の語学研修を受けてきました。その成果をここに報告するにあたりまして、観光旅行の

DIGES (Diploma for German and European Studies) 授与

DESKの教育プログラムなどへの積極的参加や、助成金の交付を通して、ドイツ・ヨーロッパ研究における成果が認められた大学院生・学部生に対して、2002年3月に修了証(DIGES)が授与された。証書の授与は、3月27日に、マッシモ・カッチャーリ氏来日記念レセプション会場において、来日中のDAAD極東局長イレーネ・ヤンセン氏によって行われた。修了証が授与された大学院生・学部生は、以下にあげる16名である。

DIGES (大学院生)

池辺範子、河村弘祐、高橋亮介、森咲里奈、吉田徹

DIGES (学部生)

大木道生、橋本悟、福島美夏、阿部弘和、稲葉佑介、上島千尋、上田知夫、加藤優子、工藤弘毅、中嶋朋子、水野英美

井関正久 (DESK)



DAAD極東局長イレーネ・ヤンセン氏からの修了証授与

でした。

6 課外活動

ヴィシーの学校では、授業後あるいは週末に各種文化的行事や遊興、遠足などが催されていました。他の学生と知り合う機会となり、また彼らとはフランス語にて話すことになるから、自然とフランス語を使う機会が増え、また見聞という点においても有益でしょう。

次に私の受けた授業についてもう少し書きます。授業は午前と午後に分かれており、午前は基本的に文法、午後は私の場合、オーラルなコミュニケーションを重点に行われました。

午前は先生によって教科書を使ったり、あるいはプリントを配ったりして、それを教材に進められました。ひとつのクラスが週を経るごとに少しずつレベルを上げていく、つまり長期間いるひとは同じクラスにいても段々上のレベルに上がっていく、という仕組みのようです。勿論、クラス間の移動は可能であり、また、同じクラスでも定期的に先生の交代があるようです。

私のいたクラスは中級に位置付けられていましたが、先生曰く文法はほぼ終えたということで、ボキャブラリーを増やしていく、という段階だったようです。

午後のクラスは午前とは全く独立したクラスのメンバーも先生も違います。私のクラスでは聞き取りの練習をした

り、軽いディスカッションや意見交換をしたり、またグループで作文をして口頭発表をする、といったことを行っていました。ちなみに、蛇足ですが、水曜の午後は毎週休みでした。

ヴィシーの学校の先生方のなかには大変人間味に溢れた（単に面白いという意味でなく）先生もいらして、授業にてそういった先生に出会うことも、期待してみてもいいでしょう。

授業全体を通して一つ感じたことは、よく「日本人は話すのが苦手だ」と言われることについて、確かにその通りなのかもしれませんが、数多くいる他国の学生のなかにもよく喋るひともいればあまり喋らないひともいる、話すのが上手なひともいればそうでないひともいる、という具合なので、他の国の学生を前に「私は日本人だから…」とあまり気後れする必要はないかと思えます。私も、普段人前で話すのが大変苦手なのです（ましてフランス語にて）が、それでもそのように感じましたので、皆さんはもっともっと積極的に授業に参加されてはよろしいのではないのでしょうか。

最後に本稿を締めくくるに当たって、純粹に個人的で恐縮ですが、大変美しい体験について触れたいと思います。それはグラヴィエ氏との再会です。

氏は、先学期DESKチュートリアルにて開かれました、ヨーロッパの安全保障への取り組みに関する講演会（似

たような題材のより規模の大きいシンポジウムが全く別に開かれたということですが）に、カザボンヌ・マゾナーヴ氏（フランス大使館一等書記官）と共に講演者として招かれました、現在ENA（国立行政学院）にて研修中の、フランス政府の若手高官であります。

私は氏をパリの住居に訪ねましたが、氏は親切にも、語学研修後の週末の間、私を泊めて下さり、私はパリにて忘れがたい体験をすることができました。

氏はフランスの高級官僚らしく、公に仕えるものとしての矜持と尊厳を備えられ、絶えずその理念とあるべき姿について語っておられました。

私は氏の高尚なる精神的な教示を受けたことと共に、パリにおける暖かいもてなしに対して感謝をしきれないところであります。また、そのようなきっかけを与えてくれたDESKに対しても深く感謝するところであります。

阿部弘和（法学部3年）

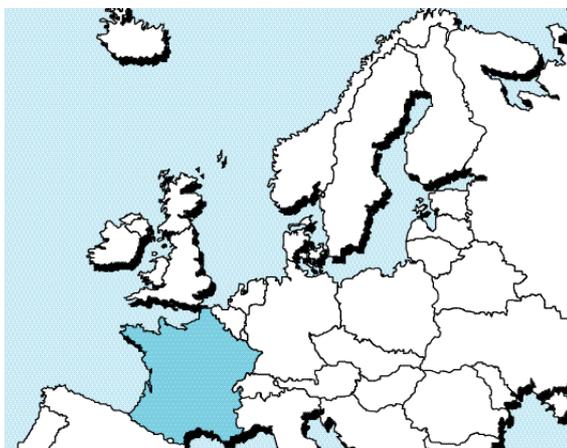


プラハにおける史料収集

修士論文作成に必要な史料を収集するため、2001年9月下旬から3週間の日程でプラハに滞在しました。論文に必要な一次史料は、チェコスロヴァキア第一共和国の国勢調査などの統計資料、憲法やユダヤ系諸団体の機関紙、当時の新聞などでした。現地に行かねば見ることのできないものであったことから、なおかつ3週間の日程で必要なものがほぼ入手できたため、この機会を十分に活かすことができたと思います。

今回の主な訪問先は旧市街の中心地にある国立図書館とユダヤ博物館の文書館及び図書室です。宿泊先も旧市街を選んだため1キロ四方で全ての用事が済み、効率良く動くことができました。国立図書館はカレル橋のたもとにあり、ヴルタヴァ川の向こうにプラハ城と城下町（フラツチャニ地区）が見えます。ユダヤ文書館も橋から400Mほど離れた主要観光スポットであるユダヤ人街のスペイン・シナゴークに隣接した建物の中にあり、中世の街並みが残る旧市街の散策を楽しみながら毎日通うことができました。

ちょうど米国の同時多発テロの直後



で不安がありましたが、市内では一日中観光客が絶えることがなく、また情報の乏しさで現実に起こっていることを忘れてしまうほどでした（米国の爆撃開始も5日後に知ることになりました）。テロの影響を感じたのは帰国の際で、利用航空会社のサベナ・ベルギーが会社更生法適用になったことにより飛行機が変更になったこと、そして空港での検査が厳しくなったことくらいです。

まず、今回の史料収集に際し感じたことは、チェコの研究機関が想像以上にコンピュータ化されていることでした。ドイツなど西欧の社会と比べて、いわゆる中東欧という旧社会主義圏を想像すると、何かと手続きに苦勞するのではないかと危惧していましたが、実際は、史料の有無やその請求番号などは、日本にいながらEメールで情報を入手でき、リスポンスも非常に早く、かつ丁寧な対応で驚きました。（ただ毎回そうではないようですが。）

私の見たい史料の多くは両方の図書室にありましたので、ユダヤ文書館の開館日である火曜、木曜以外は同じ史料を国立図書館で閲覧することができました。無論、自身のコンピュータも持ち込みが可能でした。国立図書館の読書室は広く、天井も高く、歴史を感じさせるような趣のある空間なのですが、非常に暗く、長時間そこで作業をするにはしんどいものでした。

国立図書館は、すぐに史料を見たいならば、一週間前にメールで史料請求リストを送って請求すればいいとのことだったので、出発前にメールで見たい史料名を箇条書きにし送ると、早々に請求済みを知らせる返事と請求番号の連絡を頂くことができました。そのため、夜中に到着した次の日の午前中に早速図書館に赴くと、請求史料をすぐに見ることができ、非常に効率良く利用できたと思います。事前の情報では請求してから1～2日かかるとのことでしたが、新聞などは2時間ほど待てば手にでき、不便さをほとんど感じませんでした。国立図書館は利用にあたり登録をしなければなりませんが、短期の滞在（1ヶ月程）だとパスポートを見せ（コピーでも可。）20Kc（1Kc=約3.3円）で登録証が入手できます。この証明書を持っていると、レファラン

ス・ルームのコンピュータでインター

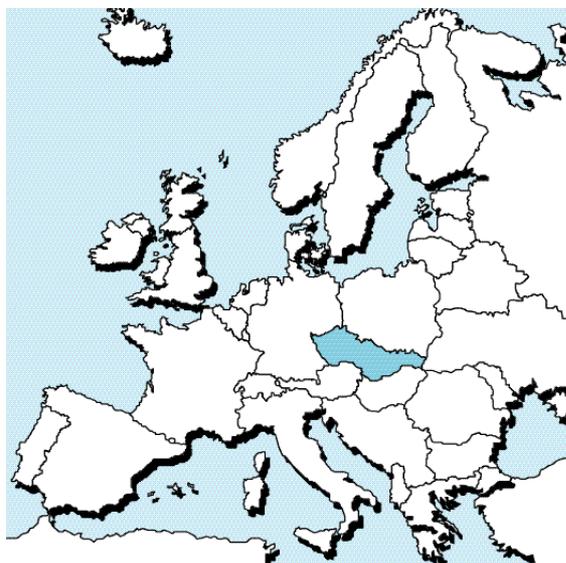
ネットも利用でき、更に日本語も読めますので非常に助かりました。ユダヤ文書館も同様に日本でコンタクトを取っていたため、とてもスムーズに利用できました。ここではパスポートの掲示もなく、紙に名前と滞在先住所を記入するのみで入館証がもらえます。メールでやりとりをしていた図書室の担当の方もお会いでき、非常に親切丁寧に利用方法や文献所在について教えていただきました。チェコ語の会話はまだまだでしたが、大抵、英語もしくはドイツ語を話せる方がいたので、さほど苦勞はしませんでした。また、ユダヤ百科事典Encyclopaedia Judaicaなども日本の図書館書庫で埃まみれのものではなく、最新のものが揃っています。

ただ、現地で入手史料をすぐにコンピュータにインプットしようと思っていたのですが、新聞のコピーに予想以上に時間がかかり、予定が多少狂いました。（時間がかかることを知っていたので日程を3週間にしていたのですが、それでもぎりぎりでした。）国立図書館では1935年以前のは、セルフコピーが不可で、更に新聞はマイクロフィルムの形でコピーを扱っていたので最低3週間かかるとのことでした。ただ、帰国日に合わせ仕上がるよう頼むことが可能で（場合によりけりだと思いますが）実際、2週間ちょっとで出来上がっていました。今回の論文の対象期間は第一次世界大戦終結後

のチェコスロヴァキア第一共和国、それも1930年までとしていますので、一次史料は全てこのやり方での入手となりました。

ユダヤ文書館では、新聞のコピーが不可能でしたが、小さい規模の図書室でしたので、請求するとすぐに史料が出てきて、更にコピーを頼むと担当の方がその場でコピーしてくれ、なおかつコピー代は国立図書館よりも安かったです。（普通の書籍などは2Kc（学生）国立図書館はセルフコピーで1枚3Kcでした。マイクロフィルム&ゼロックスコピーは1枚9Kc（約30円）支払いは現金のみです。）また、文書館の専門職員の方にアポイントメントを取り、文書館史料について相談することができました。その際に、ユダヤ博物館の文書館には私の探しているような史料はなく、全国のゲマインデ、学校や地域コミュニティ関係のものが保存してあるということが判明しました。ただ、今後、更に細かくユダヤ人社会の分析をする際には利用できそうです。

論文で扱うようなシオニスト系組織や国際関係などに関する史料は国立中央文書館にあるとのことで、残念ながら今回は行けませんでした。ただ、当時のユダヤ系諸団体関係史料リスト、その文書館所在情報が掲載されている本（Křest'an, Jiří / Blodigová Alexandra / Bubeník Jaroslav, Židovské spolky v českých zemích v letech 1918-1948 (Praha, 2001)）を紹介して頂き、ユダ



ヤ関係の専門書店で購入することができました。最新の史料情報で、どの文書館にどの史料があるのかがリストにされ、なおかつ請求番号まで載っているもので今後の収集にとっても役立つものだと思います。本の購入に関しては、今回古本屋をじっくり見る時間はなかったのですが、日本でもドイツでも手に入らなかったチェコ語・ドイツ語辞書を購入することができました。普通の本屋ではなかなかユダヤ人史を扱ったものがなく、あったとしても既に持っているものでした。そもそも戦間期ユダヤ人史に関しては文献が乏しく、かつ雑誌論文がほとんどですので、本の形になっているものを探するのは非常に難しいです。

また、ユダヤ系各機関紙の所在情報（プラハ市内の上記二つの図書館と国立博物館の所有史料名称と年号のリスト）を入手でき、更なる史料を国立博物館の図書室で閲覧しようと訪れたのですが、雑誌部門は別のオフィス、ヴルタヴァ川向こうのプラハ郊外の非常に不便な場所にあることが判明し、結局現物を見ることはできませんでした。そこは週に一回しか開館せず、更に現物を見るのに一週間かかるとのことでしたので、帰国一週間に迫っていたため今回は閲覧を諦めることにしました。

そしてユダヤ文書館の図書室の方が、戦間期ユダヤ系組織の研究者（現在カレル大学とニューヨーク大学のプラハ校（？）で歴史を教えているとのこと。）を紹介して下さり、帰国間際にお会いすることができました。私のテーマとかなり近いことを研究されており、論文に関し貴重な助言を頂き、またユダヤ人史研究状況も教えていただきました。（やはりまだまだ未開であり、文献が出ることはまれとのこと。特にチェコでの研究は発展途上にあるようです。）そしてチェコでも入手不可であった雑誌Historia Judaicaの論文などをコピーさせて頂くこともでき幸運でした。（以前、ニューヨークのユダヤ研究所でも探したのですが、そこでも入手できなかったものでしたので本当に助かりました。）なおかつカレル大学の戦間期チェコスロヴァキア史の教授もご紹介いただけました。また、知人から紹介して頂いていた日本人留学生にも会い、留学生活や大学（語学研修を含め）関連の参考になる話が聞けたのも今回の

史料収集で得られた貴重な情報です。

図書館などへ行かない日は部屋でコンピュータへの打ち込み作業をしました。新しく入手した論文や史料を読み、本文に組み入れていくのですが、すでにかなり制限枚数をオーバーしており、全てを載せることができないのが残念でした。また、チェコにおいても入手できない史料・文献がやはり何点かあり、それはおそらくイスラエルにあるかと思うので、いずれはイスラエルの文書館にも足を運びたいと思っています。

短い滞在でしたが、様々な研究関係者と知り合うことができ、今後の貴重なコネクションが広がり、成果のある史料収集となったと思います。

森 咲里奈

（大学院総合文化研究科
地域文化研究専攻修士課程 現博士過程）



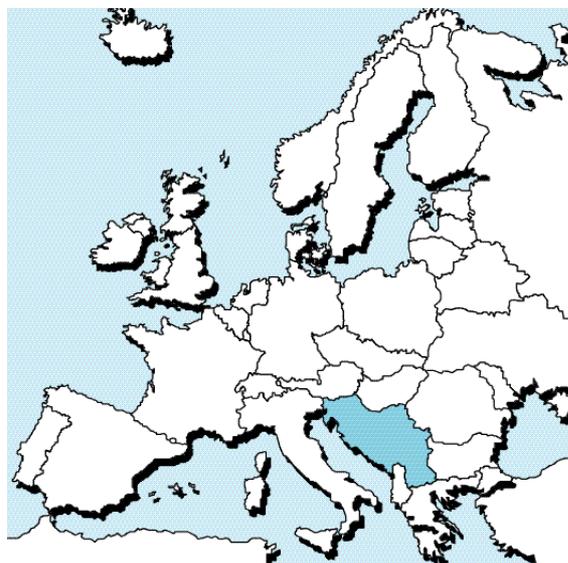
旧ユーゴスラヴィア地域における資料収集

1970年代以降、世界中のイスラーム地域においてイスラーム復興と呼ばれる現象が見られる。イスラーム復興現象とは、非イスラーム化しつつある社会に対する危機感から個々のムスリムの中にイスラームを実践しようという認識（＝イスラーム覚醒）が生まれ、社会的に組織された運動（＝イスラーム復興運動）に発展する、トータルな活

動の総体を意味する。旧ユーゴスラヴィアの一共和国で、ムスリムが住民の4割以上を占めるボスニア・ヘルツェゴヴィナについても、そこで起こったイスラーム意識の高まりをイスラーム復興として捉える議論が存在する。

ボスニアのイスラーム復興にとって一つの大きな契機となったのは、1968年にボスニア・ムスリムが「ムスリム人 Muslimani」という民族名を与えられたこと、（もう一つは、広義には1980年代のユーゴ全体で民族主義が高まったこと、狭義には1980年代末にコソヴォを巡るアルバニア人との対立からセルビアでセルビア民族主義が高まったこと）であろう。ムスリム人の承認の際にユーゴ共産党や世俗的ムスリム知識人が「『ムスリム人』は民族的概念であり、イスラームという宗教的帰属とは全く関係がない」という立場をとっていたことに対して、宗教者側からの反応は限られていた（あるいは表面化しなかった）。ただ、一部の宗教者、知識人の間に危機感が生じ、イスラームの復権を唱える者が存在したのもまた確かである。その中心にあったのがユーゴスラヴィア・イスラーム協会 Islamska vjerska zajednica Jugoslavije（ユーゴスラヴィア唯一の公認イスラーム組織）内部の一組織、ボスニア・ウラマー協会 Udruženje ilmije Bosne i Hercegovine の委員長ジョゾ Husein Đozo であった。

今回（2002年2月-3月）の研究旅行では、イスラーム協会、ボスニア・ウ



ラマー協会発行の定期刊行物を読むこと（ガージ・フスレフベイ図書館Gazi Husrefbegova biblioteka）1960年代-1980年代のボスニア宗教委員会の議事録を調べること（ボスニア・ヘルツェゴヴィナ・アルヒーフArhiv Bosne i Hercegovine）の2つを目標としていた。しかし、については、宗教委員会関連の資料が未登録であるという理由で閲覧を断られたため、目的を果たすことは出来なかった。ただ、資料の存在を確認することが出来たので、登録されるのを待って、次回に期待したい。

については、ウラマー協会発行の『復興Preporod』（隔週刊）とイスラーム協会発行の公式機関誌『グラスニックGlasnik』を通読し、関連記事のコピーを入手した。ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおけるイスラーム復興の担い手であった（と考えられる）若手ウラマーたちの動向の一端も、『復興』誌において知ることが出来た。

ボスニア・ウラマー協会は、(1) 自主管理システムの中の連合労働組織の一つとして、国庫からの年金、健康保険、失業保険をウラマーなどの「聖職者」に支給すること、(2) 他の宗教組織の同種の協会との友好関係を築き、民族間の調和を維持すること、(3) イスラームの教育と信徒の宗教生活全般において、それぞれのウラマーが果たす宗教的役割を補助すること、などとされていた。1964年にジョゾが委員長になるまでのウラマー協会は、実質的に(1)と(2)の目的しか果たしていなかった。しかし、彼が委員長に就任すると、中央委員会において、ウラマーに対するイスラーム教育の強化と精神的、物質的補助、出版活動の強化を協会の活動の中心に据えることを決議した。この決議を受けてウラマーを対象にしたイスラーム教育セミナーがボスニア全土で開かれた。また、出版活動も、ジョゾの委員長就任後、にわかに活発になった。1951年発行の『暦Takvim』誌（年刊）は1964年を境に大幅にページ数を増やした。1970年にジョゾが編集長となって立ち上げられた『復興』誌は、イスラーム協会の機関誌には掲載されない、政治的テーマをも積極的に扱い、信徒の社会生活全般におけるイスラームの実践を訴えた。『復興』誌に掲載されたジョゾの筆による記事の主張は大まかに以下の3点に集約できよう。

- 1、ムスリム（人）の精神的支柱であるイスラームの実践を呼びかける
- 2、飲酒、ドラッグ中毒などに代表される若年層のモラルの低下を改善する
- 3、世界のイスラーム諸国との強調、友好を促進する

1960年代以降ボスニア各地で開催されたセミナーでは、これらの主張が繰り返されていたであろうと想像できる。1970年代後半になると、若手ウラマーを中心に、ジョゾの主張に同調する意見が『復興』誌に掲載されるようになる。

今後、更なる検討が必要であることは言うまでも無いが、イスラームを現代社会に即して再解釈しようというジョゾのモダニスト的立場は、1903年から1912年までイスタンブルに学び、帰国後はウラマー長として大きな影響力を持っていたウラマー、チョウシェヴィチMehmed Džemaludin Čaušević以来、ボスニアのウラマーの中では常に大きな勢力を保ってきたようだ。1983年のサラエヴォ裁判で有罪とされたイゼトベゴヴィチ Alija Izetbegović（共産主義崩壊後の共和国幹部会議長）らの「イスラーム原理主義」路線は広い共感を集めなかったが、イゼトベゴヴィチらによる「青年ムスリムMladi muslimani」（1939年に結成されたイスラーム組織、第2次大戦後共産主義政権によって非合法化される）によって唱えられた「イスラーム原理主義的」主張はジョゾらのモダニスト勢力の主張の影響を受け、より漸進的な運動になっていったと推測される。

1970年代のボスニアにおいてはユーゴスラヴィアの自由化路線のため、60年代に比べて比較的自由な宗教活動が容認されていたが、上述のような主張に対しては批判が大きかった。ジョゾ自身も、イスラームを強調する言動の故に、当局によりたびたび活動停止を余儀なくされている。今後ボスニアのイスラーム復興の政治的側面を明らかにしていくためには、前述のボスニア・ヘルツェゴヴィナ共和国宗教委員会の活動を詳細に検討することが不可欠であろう。当面は、『復興』誌の分析を通じて、ボスニア・ウラマー協会の活動をイスラーム復興運動という観点から研究し、ムスリム・ボスニア人の民族主義とボスニアのイスラーム復興の関係について（2002年5月に行われる日本

西洋史学会第52回大会での研究報告のテーマとして考えている）考察してみたい。また、20世紀初頭から続くボスニアのモダニズム・イスラームの伝統の思想的系譜を明らかにしたい。これは、政治的、経済的にEUとの結びつきを求め社会的にもヨーロッパへの帰属意識の強いボスニア人 Bošnjak（男性）Bošnjakinja（女性）が、南東欧という枠組みを超えてどこにアイデンティティを求めていこうとしているのか、について考えるためにも不可欠な作業であろう。

長島大輔

（大学院総合文化研究科
地域文化研究専攻博士課程）



イギリスにおける研究調査

今回DESK助成金を受け、2002年3月6日から4月3日までの約1ヶ月、イギリスに渡航し研究調査を行いました。渡航の目的は、将来執筆予定の博士論文において使用する史料の収集調査であり、一回で完結した調査とは性質が異なるため、具体的な調査結果というよりは、そのプロセスの報告を行わせていただきます。

私が現在研究しているテーマは、近代イギリスにおける貨幣をとりまく人々の経験を、経済の側面からだけでなく、より文化・社会に引きつけて考察することです。その際に注目するのが、1694年イングランド銀行の設立にはじまるといってよい紙幣（ペーパー・マネー）であり、それを成り立たせていた、社会における広い意味での信用です。

イングランド銀行アーカイブ

私の研究において最も重要性をもつ場所は、もちろんイングランド銀行です。イングランド銀行のアーカイブでは3月11日から22日までの約二週間調査を行いました。

300年以上の歴史を通じてイングランド銀行は、近代イギリスの貨幣・信用システムの中核を担い続けてきました。その設立までイギリスの貨幣システムの中心をなしていたロイヤル・ミントが、鑄貨（コイン）の鑄造を行う施設という性質上、自然から産出される貴金属というファクターに縛られていた

のに対し、それから全く自由ではなかったにせよ、人為的な信用の創出に関して大きな力をもったイングランド銀行はまさしく近代的な貨幣システムの成立において大きな役割を果たしたといえます。

イングランド銀行のアーカイブは、シティの中央部スレッド・ニードル街のイングランド銀行内にあります。地下鉄ではその名のとおりのバンク駅で下車し、元王立取引所の建物の斜向かいがイングランド銀行の建物になっています。18世紀末、イングランドで多くの暴動が起こった時期には、刑務所などと並んで暴動の標的とされたのがこの建物でした。しかし民衆暴動にはある程度寛容であったといわれるシティの当局者もイングランド銀行への襲撃には厳しく対処し、防衛隊を組織してその建物は守られたという歴史があります。そのようなことを考えるとイングランド銀行がイギリス経済の中心であるシティにおいても、ひときわ重要な施設であったことが理解されます。

イングランド銀行は、中央銀行という性質上、当然ながら一般には開放されていません。警備も厳重で、アーカイブにたどり着くまでには二重ドアをいくつもくぐることとなります。よってアーカイブで調査を行うためには、事前の予約が必要とされます。私の場合は、日本から事前にEメールを利用してアーカイブと連絡を取り、予約を入れてもらいました。以前にはイングランド銀行の史料は一般には利用することができず、20-30年前でも簡単にはアーカイブの史料を見ることは難しかったようですが、現在のアーキビストであるGillett氏の努力によって方針が変わり、研究者に対して積極的に史料を開放するようになったのだそうです。

アーカイブへ入るのも出るのも、トイレに行くときすらアーキビストの付き添いが必要という不便はありましたが、先ほど述べたGillett氏や日本から連絡を取っていたMillard氏などアーキビストたちは非常に協力的な人々でした。アーカイブの史料を見る場所は、イングランド銀行のライブラリーと同じ場所にあるのですが、私が訪れた二週間ほどに関しては、何らかの作業を行っている人は一日に4-5人ほどで、アーキビストが対応できる程度に予約人数を制限しているということはあるに

せよ、思ったよりはこの施設を利用している人数は少ないという印象を受けました。

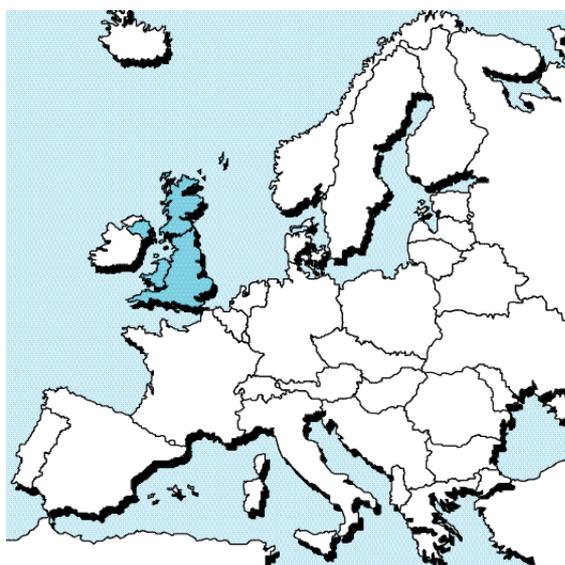
この場所に保管されている史料は、実際の業務に使用されていたものだけに、ほとんど全てインデックス化されており、検索可能な内部用のデータベースも存在します。私が利用したのは主に理事会および銀行内部の委員会の議事録であり、そこにイングランド銀行で扱われた事柄を集中的にみるができます。18世紀における同銀行は支店をもたない単一の銀行であり、そこに関与する人間の数も現在とは比較にならないくらい少数であったため、政府に対する借款から、個人が年金を求める陳情までが理事会で広く扱われていたという事情がそこにはあります。理事会の議事録に対応した、会議で使用された書簡類も保存されており、陳情書の実物などを見ることができました。

さらに興味深かったのが、18世紀中頃からイングランド銀行の法律問題を扱っていたFreshfieldsという法律事務所が保存していた資料でした。この中には銀行内部での不正をはじめ、偽造事件や破産に関してなど、銀行と法律に関連する幅広い資料が含まれており、イングランド銀行だけではなく、当時の社会状況とも関連した研究を行うために非常に有益な史料であると感じました。

その中から今回は特に、18世紀末からの対仏戦争期において急激に増加し、

社会問題となった偽造に関連して投獄された女性たちがイングランド銀行に宛てて書いた陳情書を多数複写してきました。その背景としては、対仏戦争において国外での戦費調達必要性などから貴金属の流出が発生し、鑄貨の深刻な不足が起きました。さらにはフランス軍がイギリスに上陸するという噂なども手伝って、人々は貴金属を手元に置いておこうとし、地方銀行並びにその最後の貸し手の役割を果たすようになっていたイングランド銀行は紙幣と貴金属との兌換を停止することに加えて、鑄貨に代わる小額の紙幣を大量に発行します。それまで紙幣をほとんど使うことがなかった人々が突然紙幣を日常的に使用せざるを得なくなったわけです。大量発行のために質が下がり、偽造が容易になった紙幣という要素に加えて、人々が紙幣に対して不慣れであったという事情、さらにはフランス軍の陰謀説というものもあるのですが、これらの要素が組み合わさってこの時期の大量の偽造が発生しました。そしてこのときは未だに、実際に偽造を行うことと、偽造された紙幣を使用することの間に区別が設けられておらず、偽造紙幣の行使によって多くの人々が投獄されました。

このようにして投獄された多くの人々が、最悪の場合死刑が科せられる偽造による処罰を減刑してもらうため、あるいは劣悪な環境であった刑務所での生活の改善を求めてイングランド銀行



に陳情書を送りました。まだ詳しく分析したわけではないので具体的に述べることはできませんが、私はこれらの陳情書の中に、当時の人々が新たに手にすることになった紙幣に対する考え方が現れてくるのではないかと考えています。そして特に、いままで論じられることの少なかった女性の貨幣との関わりを、極端な状況であるにせよ、見ることができるのではないかと考えています。さらには、極端な状況であるからこそ人々は貨幣を扱う際の一つのあるべき姿に訴えるのではないかと考えることもできると思います。

イングランド銀行アーカイブではその他に、先に述べた理事会議事録とそれに関連する史料および財務委員会の史料を閲覧・複写してきました。イングランド銀行が保管している史料が以前非公開だったこともあり、20世紀前半に書かれたイングランド銀行の歴史に関する著作などでは、史料の具体的な出所が明らかでなかったりと、調査に関してはほとんど手探り状態であったことから調査に費やした時間に対しての成果は十分とはいえませんでした。実際の史料を手にする事で将来の大きな手がかりとなったと考えています。

ロンドン・メトロポリタン・アーカイブとコーポレーション・オブ・ロンドン・レコード・オフィス

ロンドンには多数のアーカイブおよびレコード・オフィスが存在します。私が訪れた施設のうち、まずロンドン・メトロポリタン・アーカイブ(LMA)とコーポレーション・オブ・ロンドンでの調査について述べます。その前に日程に関してですが、イングランド銀行のアーカイブとは異なり、以下述べる場所に関しては予約などが不要であったことから、特に日程を定めず必要に応じて訪れることとしました。

ロンドン・メトロポリタン・アーカイブは、以前のロンドンとミドルセックスに関する史料を保管している施設です。ロンドンの中心部からやや東に位置し、最寄りの駅はファリンドン駅です。建物としては小さくはないのですが、インデックスやマイクロ史料においてある部屋と閲覧室を合わせても、一般に調査を行う人間が使用するスペースはそれほど広くはないという印象

でした。

ここで私が見たいと思っていたのは、18世紀前半の偽造事件に関わる裁判史料だけだったのですが、その他にも食料品商のライセンス記録や、家族の個人的記録など、興味深い史料が多くありました。残念ながら目的としていた史料も私が考えていたような性質のものではなく(実際にはここに保管されていたのは偽造事件に関する裁判史料のごく一部でした)その他の史料は詳しく見る時間がなかったため、それらは将来の課題ということになりました。

次にコーポレーション・オブ・ロンドン・レコード・オフィスですが、これは現在のロンドン市庁舎の中にある記録保管所です。ここにはロンドン市に関する史料の他、ロンドンで行われた裁判史料が保管されています。イングランド銀行と同様、現在も機能している施設だけに、入り口では空港にあるような金属探知器に荷物を通してチェックを受けなければなりません。レコード・オフィス自体は、市庁舎の一室であり、閲覧者がせいぜい6人が入れられるくらいの、LMAよりもさらに小さな部屋でした。

ここでは刑事裁判所オールド・ベイリーの裁判記録と、少額債務の裁判記録を閲覧・複写してきました。後者に関しては、その記録の中に女性の債務者が多く出てくることを期待していたのですが、予想していたほどの人数は確認することができませんでした。考えてみれば、この時期の裁判に関して結婚している女性は自らの名前で訴えられることはほとんどなかったため、債務者である女性が訴えられる場合は夫の名前で訴えられていたわけです。よって女性の名前があまり出てこないのは当然といえるのかもしれません。さらには、訴訟の対象となっている金額が少ないことで、記録も非常に簡略なものでもしかありませんでした。このように実際史料を見てみて、使用可能な資料が限られていることに照らして、研究の方針を変えなければならないことが分かりました。

パブリック・レコード・オフィス
イギリスで最大そして最も有名なレコード・オフィスが、パブリック・レコード・オフィス(PRO)です。イギリスの歴史に関する史料の主要なものが

この場所に集められています。PROはロンドンから南西に行ったウィンブルドンの近く、キュー・ガーデンに所在します。私は滞在の前半はロンドンのベーカー・ストリート、後半はロンドン大学やブリティッシュ・ミュージアムのそばのブルームズベリーに宿泊していたので、PROまで毎回約一時間かけて行くことになりました。後に書くように、ブルームズベリーに近いブリティッシュ・ライブラリーにほとんど毎日通っていたので、滞り場所の選択としては悪くはなかったと思いますが、短い滞在において往復に一時間の移動時間をかけることは、多少時間の浪費であったかもしれません。

PROでは主に、破産裁判の記録を調査しました。コーポレーション・オブ・ロンドン・レコード・オフィスで調査した少額裁判と破産裁判との違いは、現在という破産という制度が適用される場面が、破産を申し立てる人物が商人であること、そしてその人物の抱えている債務が100ポンドという、当時では非常に高額な債務であることなどを条件としていたところにあります。そのような条件が必要とされたことから女性の破産者は少なかったわけですが、18世紀後半という私の研究している時代は破産が急激に増加した時期でもあり、破産裁判の記録は非常に多く、そのごく一部しか調査することはできませんでした。具体的には被告の名前によってインデックス化されている史料が数百件存在します。さらには、PROでは史料の複写に関して制限が非常に厳しく、今回の滞在期間では満足のいく資料を収集することはできませんでした。しかしそれでも破産裁判の史料に触れられたことは、自分の研究にとって非常に有益なものであったと思います。

ブリティッシュ・ライブラリーと
ニュースペーパー・ライブラリー

アーカイブやレコード・オフィスとは異なり、ブリティッシュ・ライブラリーは、午後8時半まで閉館していたため、アーカイブが閉まる5時頃から閉館の時間まで、ほぼ毎日ブリティッシュ・ライブラリーに通いました。ブリティッシュ・ライブラリーは、前半に滞在したベーカー・ストリート、後半に滞在したブルームズベリーからも近いケン

グス・クロスに所在するため、十分に利用することができました。ここでは主に、18世紀のパンフレット類と、日本では読むことのできない書籍を読みました。具体的には、刑事裁判所・オールド・ベイリーでの裁判記録である『オールド・ベイリー・セッションズ・ペーパー』や、19世紀初めの福音主義運動の機関誌であった『クリスチャン・オブザーバー』を中心に、18-19世紀に出版された信用に関連するパンフレットなど読むことができました。残念なことに、『クリスチャン・オブザーバー』の創刊から3年ほどは欠本であり、18世紀の書籍はほとんどがコピー不能ということで、資料の収集という面では、短期間の渡航では大きな困難があることが分かりました。

ニュースペーパー・ライブラリーは、ブリティッシュ・ライブラリーの別館であり、場所はロンドン郊外のコリンデルにあります。ここでは古い時期の新聞類を集中的に保管しており、歴史研究にとって欠くことのできない場所です。今回の調査では、それほど新聞の史料は調査しませんでした。『モーニング・クロニクル』や『モーニング・ポスト』などを読んできました。

調査の成果

今回の渡航調査においては、1ヶ月弱という短い期間ながら4つのアーカイブ/レコード・オフィスとブリティッシュ・ライブラリーおよびニュースペーパー・ライブラリーといくつもの場所を訪れることができました。多くの場所を訪れた分、調査の焦点が少々ぼけてしまったかもしれませんが、将来の研究活動のためには、史料がどこに保存されているかを実際に確認しておくことができたのは非常に有益であったと思います。

日本に持ち帰ることができた史料の主要なものは、イングランド銀行の史料とPRO所蔵の破産裁判記録、BLのパンフレット類の複写です。さらには、ロンドンの新・古書店で研究資料を購入してきました。外国に関する研究において、研究対象地での研究動向を書店などで確認することは非常に意味のあることだと思われます。それに加えて、イギリスでの歴史研究セミナーにも参加してきました。それらの点でも今回の滞在では多くの情報を得ること

ができました。このような機会を与えてくださったDESK助成金には非常に感謝しております。今回の渡航調査で入手した資料・情報そして修正された研究方針をもとに、実際の研究成果へとまとめてゆきたいと考えています。

新 広記

(大学院総合文化研究科
地域文化研究専攻博士課程)



イギリスにおける資料収集 および調査

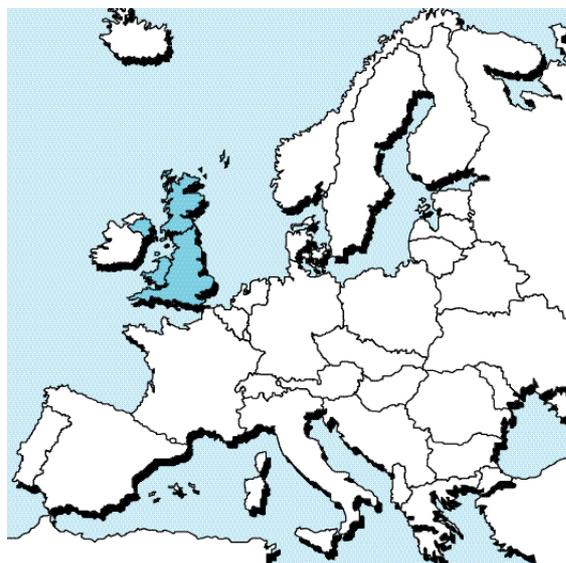
今回のDESKの研究援助を受けた目的は、日本国内では手に入らないまたは手に入れにくい博士論文執筆のための資料の収集及び調査であった。博士論文では、1920年代に英米中流階層住宅のような家具、室内空間構成とインテリア産業組織を日本に導入し、それを近代日本の文化社会に相応しいように変容させようとしたデザイン運動を取り上げるので、論文では結局日本のことだけではなく、同時代に英米で流行していた様式や産業状態について考察しないといけないのである。また、その頃には多くのデザイナーが文部省に命じられ英米に渡り、専門的な研修を受け、自分の身で洋風の住まいを体験していた。しかし、震災や戦争のことで今国内に現存している当時の欧米住宅用家具室内空間産業状況および各

デザイナーの海外での研修活動に関する一次資料は大変少なく、海外で調査する必要がある。

そのため、私は4月14日から2週間ロンドンに滞在し、イギリスの家具とインテリアデザイン業界の状況、および1920年12月から半年ロンドンに滞在し、ピクトリア&アルバート博物館(Victoria & Albert Museum、以下V&A)でイギリス歴代家具の研究を進めながら美術専科大学工芸図案科(Royal College of Art、以下RCA)とロンドン市立中央工芸学校木材家具科(L.C.C. Central School of Arts and Crafts、以下LCC)に留学した森谷延雄(1893-1927、1922年の帰国後に東京高等工芸学校建築学木材工芸両科の教員になる)の一次資料を閲覧ないし収集した。従って、主な研究活動は以下ようになった。

1)1920年代のイギリスの住宅用家具、室内空間デザイン産業界の組織、流行、様式、図案方法、生産方法、教育、販売方法、話題や議論の現状や志向を理解するように家具室内装飾業界週月刊誌、書籍、教科書、講演原稿の記録、博覧会カタログや評論、各家具会社のカタログや社内資料、図案、エスキスを調査した。

2)博士論文の問題意識である、1920-30年代に日本で論じられた「家具と室内装飾の国民性」の言説が当時のイギリスのデザイン言説に存在していたのかということ調べた。当時のイギリス人がイギリス家具に対して持ってい



た意識および「国民」という概念は一次資料の言説から読み取れた。

3) 森谷延雄の滞在日記をもとに、森谷が受けた教育、訪ねた博覧会、面会していたデザイナーなどを調べ、彼が滞在中に見聞したことを確かめた。なお、2001年に森谷のロンドン滞在をロンドンで調べる機会もあったが、RCAやLCCのアーカイブ調査はその時に行ったので、今回は学校以外の活動を中心にした。

今回の主に利用した図書館や資料館は、V&A内にある国立美術図書館(National Art Library、以下NAL)NALが管理している国立美術デザインアーカイブ(Archive of Art and Design、以下AAD) V&A各展示室とV&Aの倉庫であった。大英博物館(British Museum、以下BM) ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院(School of Oriental and Asian Studies) 住宅室内装飾専門博物館であるジェッフリー博物館(Geffrye Museum) オックスフォード大学アッシュモリアン博物館(The Ashmolean)も訪問した。どの調査先にも一次資料を見つけたが、特に参考になったのはNALの雑誌コレクションとAADに所蔵されている社内アーカイブであった。また、展示されていない、普段は見る事ができないV&Aの倉庫にある16~20世紀のイギリス製椅子のコレクション(約300脚)を見る許可をもらい、調査を行ってから主な作品を写真で記録したが、この写真は博士論文の大事な資料になる。なお、利用・複写した文献はこの報告の最後にリストアップしてある。

各図書資料館では文献の複写と家具室内空間実物の写真を最大限にとったが、書籍の購入は意識的に控えめにした。これは、最近では日本でもインターネットを通して洋書の購入が手軽な値段でできるようになったので、荷物を増やさないように今回は最近の研究書を書き店でメモし、東京に帰ってからインターネット書籍販売サイトで取り寄せることにした。

また、今回は資料調査以外に同専門のイギリスの学者との交流も目的にしていた。先ずは以前学会でお会いしたことがあった、ジャポニスムをはじめ日英の視覚文化交流とデザイン史の第一人者である渡辺俊夫氏(チェルシー美術デザイン学校教授)をオックスフォー

ドのご自宅に訪問し、博士論文の問題意識、議論設定と調査方法について相談させてもらった。渡辺氏はイギリスのデザイン史学会(SDH)会誌『デザイン史ジャーナル』の編集委員でもあるが、論文の応募依頼をいただいたのが面会のもう一つの嬉しい結果になった。RCAデザイン史専攻主任教授ジェレミー・エーンズリー氏、イギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動の研究者であるアラン・クローフォード氏、日本の住まいとマテリアル・カルチャーを研究しているインゲ=マリア・ダニエルス氏(RCAなどの非常勤講師)と、博士論文および調査方法の相談ができた。また、住宅室内空間研究所(Centre for the Study of the Domestic Interior、RCA、V&A、ロンドン大学ベッドフォードセンター共同研究所)のディレクターをつとめるエーンズリー氏に、来年2月に開催されるシンポジウムに出席と論文の発表を招待された。残念ながらV&A東洋工芸品科学芸員アンナ・ジャックソン氏をはじめ、他に数人の学者、学芸員に紹介してもらったのだが、時間のせいで結局は電話でしか話ができず、これからメールで交流を続けたい。

最後に、図書資料館が5時に閉館してからは、20世紀初期の田園都市系郊外計画住宅街の「歩き回り」調査と視覚記録を行った。訪ねたのはベッドフォード・パーク(Bedford Park、1880年代~) ハンプステッド・ガーデン・サブurb(Hampstead Garden Suburb、1906年~) ウェリン・ガーデン・シティ(Welwyn Garden City、1922年~)とベリングハム市営住宅(Bellingham 1920年代)だが、いずれも研究対象の住宅室内空間と家具のターゲットである中流階層のロンドン人が住んでいた、いわゆる家具インテリアデザイナーが演出する生活の「舞台」となった場所であった。

以上、比較的短い間であったのに、大量な一次資料に接することができ、結果が非常に大きい2週間になった。今度は見つけた資料と滞在中に燃え上がった研究テーマに対する関心をきっかけに、博士論文の執筆に専念したいと思っている。最後に、滞在中は、RCAデザイン史専攻の修士課程を今年修了する、1920-30年代の日本の家具室内装飾文化を研究している森純子氏に、お

互いの研究の相談から大幅にわたる助言、教授のご紹介やV&Aの職員食堂の案内まで、大変お世話になった。森氏、お忙しい中、時間をくださり相談をうけてくださったイギリスの研究者の方々、そして指導教官である田中純教官、調査旅行を可能にしてくれたDESKに、記して感謝の意を表したい。

資料

NAL等で閲覧・複写した一次資料
週月刊誌：

- ・ The Cabinet-Maker and Complete House Furnisher (London: Benn Bros.)
- ・ The Furniture Record (London: Smith and Botwright)
- ・ Good Furniture (Grand Rapids, MI: Dean Hicks Co.)
- ・ The Ideal Home (London: Odhams Press)
- ・ The Woodworker (London: Evans Bros.) (1920-27年発行のもの)

書籍：

- ・ Bell, J. Munro The Furniture Design of Thomas Chippendale (London: Gibbings and Co., 1910)
- ・ Bell, J. Munro The Furniture Design of Thomas Sheraton (London: Gibbings and Co., 1910)
- ・ Higgs and Hill Ltd. Furniture for Modern Houses (London: Higgs and Hill Ltd., 1920)
- ・ Hooper, John Modern Cabinetwork Furniture and Fittings (London: B.T. Batsford Ltd., 1920)
- ・ Maple and Company Interesting Interiors(London: Maple and Company 1922?)
- ・ Murphy Varnish Co. Eight Periods and their Modern Adaptation (London: Murphy Varnish Co., 1925)
- ・ Roe, Fred A History of Oak Furniture (London: The Connoisseur, 1920)
- ・ Stratton, Arthur The English Interior (London: B.T. Batsford Ltd., 1920)
- ・ Todd, Dorothy The New Interior Decorator (London: B.T. Batsford Ltd., 1929)
- ・ Wells, Percy A. Furniture for Small Houses (London: B.T. Batsford Ltd., 1920)
- ・ Wells, Percy A. Modern Cabinetwork (London: B.T. Batsford Ltd., 1922)

協会の機関誌および報告書：

・ Design in Modern Industry: The Yearbook of the Design Industries Association (London: E. Benn, 1922-4)

協会の講演原稿：

・ Arts and Crafts Exhibition Society Ed., Arts and Crafts Essays (London: Rivington, Percival & Co., 1893)

・ The Arts Connected with Building: Lectures at Carpenters' Hall (London: B.T. Batsford Ltd., 1909)

・ The Incorporated Institute of British Decorators, Proceedings (London: The Institute, 1917-28)

博覧会カタログ：

・ The Daily Mail Efficiency Exhibition (1921年2月、ロンドン・オリンピック)

・ The British Industries Fair (1921年2月～3月、ロンドン・パーミングハム・グラスゴー)

・ The Building Exhibition (1921年4月、ロンドン・オリンピック)

・ The Daily Mail Ideal Home Exhibition & Model Village (1922年3月、ロンドン・オリンピック&ウェルイン・ガーデン・シティー)

家具会社アーカイブ(商品カタログ、流行・商品開発・宣伝方法・市場調査・販売戦略などの業務に関する社内メモ、商品写真、当時の店内写真、博覧会展示室記録写真)：

・ Heal & Sons

・ Maple & Company (AAD所蔵)

視覚資料：

・ デザイン産業協会 (DIA) グラス・スライド (家具やインテリアなど、約300枚)

家具実物：

・ イギリス製歴代椅子 (約300脚) (V&A倉庫所蔵)

サラ・ティズリー
(大学院総合文化研究科
超域文化科学専攻博士課程)

DESK主催シンポジウム

International Migration Changing Perspectives, New Approaches, and a Widening Horizon

日時:

2002年9月25日(水曜日) 15:30～
9月27日(金曜日) 14:00

場所:

東京大学駒場キャンパス
数理科学研究科棟大講義室

使用言語:

英語 (通訳なし)

プログラム:

Keynote Address:

25 September 15:30-17:00

International Migration:

A Human Development Perspective
Eimi Watanabe (sociologist, UNDP
Copenhagen)

Session I:

26 September 9:00-12:00

Changing Perspectives on
Migration:

Focus on the Consciousness of
Migrants

Presenters: Leslie Bauzon (historian,
University of the Philippines);

Dietmar Herz (political scientist,
University of Erfurt);

Keiji Maegawa (anthropologist,
University of Tsukuba)

Session II:

26 September 13:30-16:30

New Approaches to Migration:

Regional Migrations Systems and
Regional Integration Processes

Presenters: Wolfgang Hein (historian,
political scientist, Deutsches
Uebersee-Institut, Hamburg);

Motoko Shuto (political scientist,
Tsukuba);

Kazu Takahashi (political scientist,
Yamagata University)

Evening Lecture:

26 September 17:30-19:00

Diasporas, Citizenship, and Human
Rights

Yasemin N. Soysal (sociologist,
University of Essex)

Session III:

27 September 9:00-12:00

The Broadening Horizon of
Migration;

Migration as an Issue of Human
Security

Presenters: Salvatore Ciriaco (his-
torian, University of Padua);

Andreas Blaette (political scientist,
University of Erfurt);

Reinhard Drifte (political scientist,
University of Newcastle)

Panel Discussion:

27 September 13:00-14:00

DESK現代史フォーラム
ドイツの1960年代論

講演者

Axel Schildt氏(ハンブルク大学教授)

日時:

2002年9月30日(月) 15:00-19:00

場所:

東京大学駒場キャンパス
8号館306号室

使用言語:

独語(通訳なし)

ダニエル・ベンサイド氏
(パリ第8大学)
ゼミナールおよび講演会

1. ゼミナール

「神聖政治と世俗政治：シュミット、
ベンヤミン、アーレント
決断と出来事のあいだで」

日時:

第1部: 2002年10月8日(火曜日)
18:00-20:00

第2部: 2002年10月15日(火曜日)
18:00-20:00

場所:

東京大学駒場キャンパス
10号館3階会議室

使用言語:

フランス語(通訳つき)

2. 講演会:

「政治的 哲学的謎としての
ヨーロッパ」

日時:

10月16日(水曜日) 18:00-20:00

場所:

東京大学駒場キャンパス
数理科学研究科棟大講義室

使用言語:

フランス語(通訳つき)

DESKの催事情報については、
ホームページ(<http://ask.c.u-tokyo.ac.jp/desk/What's-new.html>)をご覧ください。

今後の催事情報をいち早くメール送信いたします。ご希望の方はメールでDESK事務室(desk@ask.c.u-tokyo.ac.jp)までお申し込み下さい。



DESK事務室

開室日: 月曜~金曜(祝日除く)

住所: 〒153-8902 東京都目黒区
駒場3-8-1

東京大学大学院
総合文化研究科・教養学部
8号館1階109号室

Homepage:

<http://ask.c.u-tokyo.ac.jp/desk/>

E-mail:

desk@ask.c.u-tokyo.ac.jp

Telephone & Fax:

03-5454-6112